



222.5  
N862m









明代滿蒙史料  
錄明抄實

蒙古篇一

日滿文化協會





302785

### 明代滿蒙史料序

滿洲は古來特別なる歴史を持つてゐる。其の滿洲の地に、東亞の一國としての滿洲國は、宏遠なる理想を抱いて建設せられた。爾來十年、内は國力大いに充實し、文化の向上亦著しく、外は親邦日本は固より、亞歐の樞軸諸國と國交を厚くし、國運益榮え、王道に本づく民族協和の理念は達成せられた。而して今や建國十週年を迎へ、滿日兩國共に朝野を擧げて之を慶祝するのは、斯くの如き驚異的の發展に對する抑へ難き歡喜の發露に外ならぬ。

滿日文化協會は滿洲國建國の翌年創立せられ、其の目的とする所は、滿日兩國の學界の協力に依り、東方の文化を保存し、



並に之を振興するにある。因つて其の目的を遂げる爲めに、創立以來年を重ねるに従ひ、滿洲國の文化事業には、あらゆる方面、あらゆる部門に互つて直接間接之に關與し、頗る重大なる役割を勤めて今日に至つた。今其の業績の一々を具體的に語らうとはしないが、夙く創立の當初一兩年の間に、奉天に於ける内外に誇るべき國立博物館を設立し、同時に「大清歷朝實錄」一千二百二十冊を複印して世界の學界に送つた如きは、其の最も顯著なるものである。

協會の使命が斯くの如くであるから、本年日本に設けられた滿洲國十週年慶祝會が、其の事業を行ふに當つては、協會は進んで之に參與し、亦其の使命の一端を果した。即ち慶祝會は其の事業の一として、滿洲國國寶の主要なるもの（四庫全書

及び滿洲文大藏經の一部、刻絲刺繡、陶瓷等）を東京に將來し、帝室博物館と協同して展覽會を催し、東洋古文化の昂揚に資したが、これに對して終始幹旋の勞を執つたのは協會である。又慶祝會は其の事業の一として、帝國藝術院會員の揮毫に係かる日本畫及び油畫を滿洲國政府に寄贈し、建國十週年を慶祝すると共に、其の文化の向上に裨補する所あらんとしたが、これも協會の幹旋、殊に副會長岡部子爵の努力に依つたのである。而して協會はまた創立當初の事業としての「大清歷朝實錄」の複印に鑑み、建國十週年を永遠に記念するが爲めに「明代滿蒙史料」を出版することとした。

明代に於ける滿洲及び蒙古に關する文獻は頗る多いが、政治・經濟・軍事・外交・文化等、あらゆる方面に互つて正確なる知識



が最も豊富に盛られてゐるのは、皇明實錄及び朝鮮李朝實錄である。しかも皇明實錄は十七朝合せて計二千九百十八卷、李朝實錄は二十五朝合せて計一千七百九卷、共に卷帙甚だ浩瀚であるが爲めに、之を涉獵するのは、決して容易の業ではない。因つて日本昭和八年、外務省文化事業部に於いて滿蒙文化研究事業の創められた時、其の事業の一として、これ等の兩書から滿蒙關係の記事を抄録し、以て滿蒙史の研究に寄與する所あらんとした。即ち皇明實錄の抄録は、京都に於いて内藤虎次郎・羽田亨兩博士の監修の下に、李朝實錄の抄録は東京に於いて池内宏博士の監修の下に、各業を進め、五年を費やして其の稿本を作成した。然るに此の抄録事業の終ると共に、外務省の滿蒙文化研究事業は、抄録事業と並行した他の諸事

業と共に廢止せられ、従つて稿本を出版しようとする希望はあつても、其希望は遂げられず、而して空しく今日に至つた。

今茲に本協會から出版しようとする「明代滿蒙史料」は、上の稿本に更に修正を加へたものである。其の修正並に出版は、羽田・池内兩博士の監修に依つて行はれる。出版の完成は三個月を期し、經費は之を日滿兩國の政府に仰いだ。凡そ二十卷、逐次刊行の豫定である。偶、出版界は時局の影響を蒙り、多大の制約を受けてゐるが、冀くは之を順調に完成せしめ、永く内外の學界を益したいと思ふ。

康德九年十一月

滿日文化協會會長

榮

厚



### 皇明實錄抄序

皇明實錄の中から、滿洲蒙古に關する記事を抄録刊行して、當代に於ける兩地方の史實の攷究に資し、新興滿洲國の發展に對して我邦の負へる重要な責務を果す一端に供することを企てたのは、顧れば既に十年の昔となつた。當時尙ほ龔鏞として透徹の史眼に古今を睥睨せられた内藤湖南博士は、この事業の熱心なる主張者であり、余もまた驥尾に附してその要を説き、遂に昭和八年外務省文化事業部の滿蒙文化研究の一項としてこれを實施することになつた。言ふまでもなく實錄の記事は、その性質上一般に確實性を認むべきであるばかりでなく、凡そ歷朝の政務に關することを細大洩らさず



網羅せる點に於ても、他に匹敵するものはなく、如何なる史的  
研究に於ても最も重要な典據たるべきであるが、然も尠然  
たる二千九百餘卷の巨帙に就いて、一々所要の事項を仔細に  
檢出することは、人をして煩勞に堪えざらしむるものがある  
と共に、その流布の稀少はまた容易にこれに就くことをすら  
許さない。かゝる事情が滿洲國建設の直後に於て、滿蒙の人  
文科學的研究を急務と考へた吾々をして、この事業を計畫せ  
しめた所以である。

抄録は主として内藤博士の指導の下に、當初より三田村泰  
助、今西春秋兩學士がこれに當つたが、事業開始の翌年博士は  
不幸道山に歸せられたので、その後は指導の責には獨り余の  
み任ずることになつた。さて此の事業たるや、一見極めて簡

單にして容易なるが如く見えるに拘はらず、實際に當つては  
可なりの難事であつて、從事兩學士の苦心は一方ではなかつ  
た。その一二を例示すると、第一には抄録の方針である。凡  
そ滿蒙に關する限り、大概の事件を抄出する大方針は常に動  
かぬとしても、事の大小、直接間接の關係等に依つて、固より取  
捨を加へなければならず、地域についても時には長城以内に  
及ばねばならぬこともあつて、その程度範圍については、遲疑  
逡巡容易に決定するを得なかつた。次には今日に流傳する  
數種の異本の對校である。凡例に示されるやうに、この抄録  
の爲に用ゐた底本は京都帝國大學の藏本であるが、元來この  
本は内閣文庫所藏の兩種の實錄を照合して、互の足らざる所  
を補綴したもので、實錄としては萬曆以後の分を缺き、その以



前の記事に於ても必ずしも完好ならざるのみならず、魯魚の誤にも富むてゐる。そこでこれを一々宮内省圖書寮本や帝室博物館本等に對校する煩を重ねたのであるが、その正に從ふについても、更に深い攷究を加へねばならなかつた如きことである。凡そこれらの問題は、結局編者の見識に依つて、適宜の處理を施す外に方法はないのであるが、そこには編者のみの知る大なる苦心と熱意との潜むことが領會せられねばならぬ。

かくて着手以來五年の歳月を経て、一應この事業は完了したのであつたが、その後も尙ほ機會あるごとに補訂が加へられ、更に近時刊行を見るに至つた梁氏影印本との對校をも試みて今日に至つたのである。かゝる階段を経て始めて完成

を告ぐるに至つた稿本が、今回日滿文化協會の手に依つて印行せらるゝことゝなり、曾て滿洲國新興の事情に絡むて生れたこの事業が、今その建國十周年祝賀事業の一として實を結び、有終の美を見ることになつたのは、眞に欣快に堪えない所である。今より後、滿蒙の古を稽ふる人々に、この一篇の寄與する所必ず鮮からざるべきを信ずるにつけても、この抄録を主唱せられた内藤博士の今日を待たずして遠逝を急がれたことに對して、悔恨を新にするを禁じ得ないと共に、編者三田村、今西兩學士の刻苦精勵に對して、厚く感謝の意を表しなればならぬ。

昭和十七年十一月

羽 田 亨



凡例

一本書は京都帝國大學附屬圖書館所藏の鈔本明實錄に就いて、明代蒙古滿洲に關する資料を抄出編纂したものである。

一京大本は、現に内閣文庫に收藏せられてある二通の古鈔本明實錄を、彼此綴合せて謄寫したものであるが、光宗熹宗の二朝は原本に於て之を缺き、神宗の部に關しては、實錄とは類を異にする別種の記録が採録せられてある。それで京大本は神宗以下については、別に北京京師圖書館本を鈔寫してこれを補つてゐる。内閣文庫以外、宮内省圖書寮及び帝國圖書館にもまた舊鈔明實錄が藏せられてある。これを對校して見ると、その間互に出入異同が存するので、本書に於ては、こゝに抄出した記事に就き、一々此等の諸本を參照對校して補訂を加へた。今その要を摘記すると



(イ)太祖朝より武宗朝に亙る間の記事は圖書寮本と、世宗及び穆宗兩朝の記事は帝國圖書館本と對校し、尙疑義の存する箇所就いては、近時影印に附された梁氏本とも對校した。

(ロ)校合に依つて判明した文字の異同、脱字、誤字の補正等はその數夥しく、一々注記するの煩に堪えないので、特に校勘記を附せず、概ね編者の所見に従つて訂正を施した。本文中誤字、脱字と思はるゝ箇所が尙ほ尠からず存するけれども、諸本を通じて同じきものは、暫く訂正を施さずして舊の儘に止めた。

(ハ)京大本仁宗實錄は原卷の半を缺いて僅に五卷を存し、英宗實錄はその一部に、錯簡に由る記事の逸脱があるので、これ等の失はれた箇所を圖書寮本に據りて増訂補正し、(宮)の略符を附してその由來を明示した。

(ニ)京大本神宗實錄は前述の如くその内容より推して實錄と稱すべ

きものではないけれども、その記事中には、往々實錄の記事を補ふに足るものも存するが故に、別に抄出して追補することにした。

一本書は編纂の便宜上、蒙古部及び滿洲部の二部に分け、抄出の記事は夫々原本の卷數に依つて一括し、實錄記載の年次に従つて排列した。一抄録に當つては大體次の方針を採つた。

(イ)蒙古部に於ては、漠北の地に退いた後の蒙古民族の動靜を傳へる一切の記述及び、明朝の蒙古民族に對する政治經濟軍事上の諸施設、並に對蒙古政策に關するものゝ中、特に重要と思はれる資料を收めた。

(ロ)滿洲部に於ては、取材の範圍を明代滿洲の地域に限り、此の地域内に據つて活動した諸民族の事蹟に關する一切の資料を收めた。但し日本民族に關する若干の記事は之を省略した。

一尙明代に著聞する兀良哈三衛に關する記事は、原則上蒙古部に入れ



凡例

四

るべきであるけれども、此の民族の満洲に有する關係は特に密接なるものがあるので、記事によつては特に満洲部にも收めて兩部に重出したものもある。

目次

太祖實錄

洪武元	年	三
洪武二	年	五
洪武三	年	三
洪武四	年	六
洪武五	年	七
洪武六	年	九
洪武七	年	一〇
洪武八	年	一〇
洪武九	年	一五

目次

一



洪武十年	一三三
洪武十一年	一三六
洪武十二年	一四二
洪武十三年	一四五
洪武十四年	一四九
洪武十五年	一五四
洪武十七年	一五八
洪武十八年	一五九
洪武十九年	一六一
洪武二十年	一六二
洪武二十一年	一六八
洪武二十二年	一七〇
洪武二十三年	一七四

太宗實錄

洪武二十四年	一三四
洪武二十五年	一三六
洪武二十六年	一三三
洪武二十七年	一三七
洪武二十八年	一三八
洪武二十九年	一三九
洪武三十年	一四四
洪武三十一年	一五六
二	一六一
三	一六二
洪武三十五年	一六三



目次

永樂元	年	二七〇
永樂二	年	二八六
永樂三	年	二九四
永樂四	年	三〇六
永樂五	年	三二一
永樂六	年	三三四
永樂七	年	三四一
永樂八	年	三六五
永樂九	年	四〇一
永樂十	年	四一三
永樂十一	年	四二三
永樂十二	年	四三四
永樂十三	年	四六七

目次

永樂十四	年	四七四
永樂十五	年	四七七
永樂十六	年	四八二
永樂十七	年	四八五
永樂十八	年	四九〇
永樂十九	年	四九二
永樂二十	年	四九八
永樂二十一	年	五三三
永樂二十二	年	五四一







卷三十七

洪武元年十二月丁卯朔

大將軍徐達克太原擴廓帖木兒宵遁降其衆初元主北奔命擴廓帖木兒復北平因是率兵出鴈門關將由保安州經居庸關以攻北平達聞之謂諸將曰王保保率師遠出太原必虛北平孫都督總六衛之師足以鎮禦我與爾等乘其不備直抵太原傾其巢穴則彼進不得戰退無所依此兵法所謂批亢擣虛也若彼還軍救太原則已爲我牽制進退失利必成擒矣諸將皆曰善遂引兵徑進擴廓帖木兒至保安州聞之果還軍其鋒甚銳副將軍常遇春謀於達曰我騎兵雖集而步兵未至未可與戰莫若遣精兵夜襲其營其衆可亂主將可縛也達然之會擴廓帖木兒部將豁鼻馬潛遣人約降且請爲內應達於是遣兵夜襲其軍擴廓帖木兒方燃燭坐帳中使兩童子





執書以侍衆覺變擾亂擴廓帖木兒倉猝不知所出函納靴未及意  
跣一足踰帳後出乘驛馬從十八騎遁去迨旦豁鼻馬遣其子來報  
達等勒兵進營于太原城西豁鼻馬以其將校降得兵四萬人馬四  
萬餘匹擴廓帖木兒奔大同遇春以兵追之至忻州不及而還擴廓  
帖木兒遂走甘肅

卷四十一

洪武二年夏四月甲申

臨洮捷奏至上覽奏畢卽遣使往諭大將軍徐達曰將軍提師西征  
所至克捷今李思齊又納降矣但未知慶陽寧夏攻取如何張思道  
兄弟多譎詐若其來降宜審處之勿墮其計也軍中之事尤宜慎之

○命立臨洮衛

乙酉

大將軍徐達師至靖寧州故元知院杜伯卜哈遁去達遣指揮潘某  
將兵追之不及獲其人馬還報乃遣人招之復遣兵徇下隆德縣明  
日師度六盤山至開城諜報故元豫王駐西安州遂令平章俞通源  
立柵守開城移兵趨西安次于海那都遣右丞薛顯將精兵五千人  
襲豫王豫王遁去獲其人口頭目及車輛而還



庚寅

大將軍徐達以所獲元豫王人口及頭目和林童等車二百輛送開城州以西安州所獲男女七千餘口送北京安置

卷四十二

洪武二年五月甲午朔

大將軍徐達師還至紅城右丞薛顯自明沙州以所獲王保保部將毛祥及知院尹鐸李遵正郭英左丞董信任弘等并馬二千餘匹至達師

丁酉

大將軍徐達師出蕭關遂下平涼父老相率持羊酒來迎遣指揮儲穉往隆德靖寧會指揮吳汧陳壽收未附山寨又遣段答刺罕參政麻毅等招諭華亭等處指揮朱明克延安遂以明守之

辛丑

張良臣以慶陽降初張思道在慶陽聞王師克臨洮懼而走寧夏而使其弟良臣與平章姚暉守慶陽思道至寧夏與金牌張等俱爲擴



廓帖木兒所執大將軍徐達既下平涼卽謀取慶陽令御史大夫湯和遣軍往涇州別遣指揮張煥將騎兵偵邏慶陽會和部將謝三遣人招良臣良臣以其兄被執遂以城降良臣驍勇善戰軍中呼爲小平章

戊申

張良臣復據慶陽初良臣之降也遣其參政花某詣大將軍徐達獻軍民數目尋又遣其知院李克己葛八來獻馬數達遣右丞薛顯將騎兵五千人步兵六千人同克己等赴慶陽比至良臣出迎蒲伏道左佯爲卑下以示歸順逮暮卽以兵劫營我軍不意其叛爲所衝潰指揮張煥被執顯被傷走還達謂諸將曰上明見萬里外今日之事果如前日所諭然良臣之叛祇取滅亡耳當與諸公戮力剪之

甲寅

大將軍徐達遣兵略慶陽先是右副將軍馮宗異參政傅友德聞張良臣叛率師自臨洮至涇州御史大夫湯和亦將所部來會至是達恐其黨與相扇爲聲援乃先遣兵抄其出入之路平章俞通源將精騎略其西都督副使顧時略其北參政傅友德略其東都督僉事陳德略其南



卷四十三

洪武二年六月甲子

寧州父老詣大將軍徐達降達遣指揮吳宏往撫諭之并招徠邠州等處

戊辰

大將軍徐達調鳳翔守禦指揮余思明守平涼

甲戌

大將軍徐達遣指揮陳壽將兵守原州黃旺守涇州涇州邏卒獲慶陽小元帥諜者張五十九斬之達遂自涇州率諸軍趨慶陽己卯駐于東原令右副將軍馮宗異御史大夫湯和都督副使顧時參政戴德以兵四面圍其城張良臣開城西門出沒恣人馬馳騁城下達怒督宗異進營逼其西門遣寧國衛將士守其小東門明日張良臣以

兵出戰于東門都督副使顧時擊敗之獲其裨將九人斬之

己卯

常遇春等克開平初上命遇春自鳳翔赴北平征迤北餘寇以平章李文忠輔之遇春文忠率步卒八萬騎士一萬自北平往取開平道三河經鹿兒嶺過惠州敗故元將江文清兵于錦川得士馬以千計次全寧故元丞相也速復以兵迎戰又敗之也速遁去進攻大興州文忠謂遇春曰元兵必走乃分兵千餘爲八屯伏其歸路虜果夜遁遇伏大破之擒其丞相脫火赤遂率兵道新開嶺進攻開平元主先已北奔追北數百里俘其宗王慶生及平章鼎住等斬之凡得將士萬人車萬輛馬三千匹牛五萬頭薊北悉平

辛巳

大將軍徐達督兵攻慶陽四門城上矢下如雨達兵不爲之動既而



別將李德明邏環州獲張良臣諜者竹筴斬之以狗城筴張思道理問也王保保自寧夏遣其來慶陽覘伺王師慶陽既受圍張良臣復遣還寧夏求援故獲斬之仍以參隨王敬祖將兵守彭原

壬午

張良臣自西門出兵挑戰寧國衛兵與戰少却良臣復以兵薄興武衛營指揮張四堅壁不動右副將軍馮宗異以兵擊之良臣走還達復以都督僉事陳德守其西門

丙戌

右副將軍馮宗異營卒夜獲王保保諜者四人斬之

庚寅

慶陽大雨雹山水泛溢張良臣縱兵出城爭汲龍驤衛兵擊之戰至二鼓敵大敗○李德明自環州送故元來降平章申成參政馮貴等

十八人至大將軍營

秋七月甲午

大將軍徐達遣降將李茂等將騎兵千人往隆德秦安等處收捕未附頭目杜伯不花羅左丞等

丙申

張良臣乘大風出兵與我師接戰我師擊敗之先是慶陽守者百餘人潛出東西門詣大將軍降及是戰敗來歸者又千餘人良臣懼明日登城呼呂德約降大將軍不聽

己亥

征虜副將軍中書平章鄂國公常遇春還軍次柳河川得疾而卒報至詔平章李文忠領其衆

癸卯



元合水守將參政蓋成詣大將軍徐達降獻馬二十匹成先守華池寨達令成往招其部曲又遣來降僉院王晉招諭木瓜堡鐵哥城諸寨柔遠鎮故城社頭目張彬招諭舊寨未附軍民

戊申

李茂等邏會州獲杜伯不花部將張演并達達大都虎兒送大將軍營

己酉

張良臣復以兵出東門挑戰龍驤衛官軍擊敗之獲其樞密同僉等官

辛亥

王保保部將韓扎兒攻破原州指揮陳壽俱陷沒大將軍徐達聞報與都督馮宗異參政傅友德議以驛馬關當其衝遣右丞徐禮將兵

守之又遣指揮葉谷真守彭原調指揮韋正守邠州宗異復與達謀曰今大軍圍慶陽張良臣雖困未能遽下王保保欲爲良臣聲援故令扎兒攻原州欲以援慶陽請得移軍逼關以扼原州彼無所施矣達然之宗異遂以其軍西臨驛馬關去慶陽三十里而軍是夜扎兒復攻陷涇州丁千戶退保靈臺縣

辛酉

右副將軍馮宗異引兵自驛馬關討韓扎兒扎兒走追至邠州又走宜祿扎兒聞王師追之急遂以其衆遁去宗異還屯驛馬關



卷四十四

洪武二年八月甲子

故元總制賀宗哲以兵攻鳳翔

乙丑

驃騎衛從征降將竇文明潛遣人以軍中機事報賀宗哲爲邏騎所獲併文明斬之○大將軍徐達調順德守禦平章韓政以兵赴慶陽以溫漢臣署原州同知漢臣前原州歸附官也旣而判官劉伯溫聞之自寧夏來歸達命伯溫亦還判原州尋遣指揮劉廣鐵甲馮等守之

丙寅

慶陽小元帥降初小元帥與張良臣共守慶陽及王師攻圍日急小元帥欲降爲良臣所囚至是城中降者夜劫小元帥出詣大將軍營

達受之令軍中無虐降者○元兵攻大同平章李文忠等帥師擊敗之擒其將脫列伯時慶陽未下上詔李文忠自北平往合師攻之師至太原聞大同受敵文忠顧謂左丞趙庸等曰吾與若等受命而來闔外之事有利於國者專之可也今大同甚急若候進止豈不失機衆皆諾遂由代出鴈門至馬邑敵遊騎數千奄至猝遇我師與戰敗之擒其平章劉帖木進至白楊門時天雨雪文忠疑有伏乃身引數騎入山察視之前軍已駐營去敵五十里文忠至遽命徙五里營于鏝頭其地阻水先遣人由間道達大同城中使知之元將脫列伯悉銳來攻文忠令將士秣馬蓐食閉營不出先以兩營誘敵自寅至辰前營報數至文忠不爲動頃之度其饑疲乃分軍爲左右翼身當前鋒奮擊大敗之生擒脫列伯降其衆萬餘獲馬匹輜重甚衆縛脫列伯詣軍門文忠命解其縛與之共食遂進兵東勝州至莽哥倉而還



先是元主北走屯蓋里泊命脫列伯孔興以重兵攻大同欲圖恢復至是脫列伯被擒孔興走綏德其部將復斬之來降元主知事不濟無復南向矣

甲戌

上遣都督僉事吳禎以勅書往諭大將軍徐達曰如克慶陽宜令右副將軍都督同知馮宗異掌總兵印統軍駐慶陽節制各鎮兵馬糧餉不給從前規措無致傷民鞏昌臨洮蘭州諸軍鎮守如故兵不足者益之如河中四外已寧則以都督同知康茂才所部士卒三分之一茂才帥其二往鎮山西凡太原諸城悉聽節制其一增守陝西務在處置得宜然後大將軍達偏將軍和回京定議功賞俟朕與大將軍葬鄂國公畢日大將軍當復往定守邊之策戍守諸將誥命悉頒其家可諭朕意都督僉事吳禎就令同宗異駐慶陽平章李伯昇同都

督僉事耿炳文守陝西

戊寅

大將軍徐達督諸軍攻慶陽於是將士爭穴其城城中極力救禦然奔逸歸附者甚衆

庚辰

都督僉事陳德以所獲張思道部將右丞王讓等八人送大將軍營時思道以慶陽受圍日久知其弟良臣力不能支乃遣讓等自寧夏持其金帶及所服白氎衣與良臣爲信且言王保保已往永昌俾以城降行至環州爲德所獲

辛巳

賀宗哲右丞葛彬詣大將軍降○鹽池館邏騎獲王保保麾下知院都事等送大將軍營



癸未

克慶陽初張良臣之復叛也自以其城高險而上有井泉可據以守其兵又精悍養子七人皆善戰軍中語曰不怕金牌張惟怕七條鎗又倚其兄張思道與王保保爲聲援賀宗哲韓扎兒等爲羽翼姚暉葛八之徒爲爪牙故欲拒守以圖大功及王師列營城下以困之良臣不得逞數出戰又不利又遣人赴寧夏求援皆被獲內外音問不通而糧餉乏絕至煮人汁丸泥嚙之平章姚暉熊左丞胡知院葛八等知事不濟爭獻門納師達勒兵入自北門良臣父子俱投井中達命指揮朱杲引出斬之遣指揮陸成赴京奏捷明日誅良臣之黨柴知院等二百餘人收其小平章等銀印以都督僉事陳德守之○賀宗哲遁去先是宗哲攻鳳翔指揮金興旺知府周煥等嬰城拒守矢石並下敵衆不敢近乃以荆爲龜笆每笆五人負之連絡至城西北

攻鳳凰觜城上投藁焚之敵輒以鐵鉤攫藁而去復墜石壓之而敵攻不已興旺與煥等謀曰彼之急攻謂我援兵不至必不能出戰也若出其不意出師擣之可以折其衝於是分兵出西北二門奮擊之復自城上縋兵下搏戰敵稍却有頃卷營而去衆欲追之百戶王輅曰彼未敗而退必伏兵誘我也遂斂衆遣騎往偵之至五里坡伏果發旣而敵衆復還攻城益急衆見敵勢盛欲從北門鼓行趨長安興旺輅叱之曰死生當與城俱以報國家豈可去耶衆乃止輅先承上命往臨洮收集李思齊降卒還京師遇亂因其衆入城與興旺併力備禦興旺以輅所將皆新附之衆慮其生變乃給衆曰王百戶兵新至宜有以犒之遂括城中牛畜復以布囊盛草若將餉輅士馬然輅衆以爲然併守益力宗哲攻城凡十五日或隧地或突至甕城城中隨方備禦敵不得入至是聞慶陽已下乃引去事聞上遣使勞興



旺等賜白金人百兩○右副將軍馮宗異自驛馬關遣人送賀宗哲  
麾下將崔知院等二十七人馬二十四匹至大將軍營

丁亥

大將軍徐達師次驛馬關

己丑

大將軍徐達師至原州右副將軍馮宗異右丞薛顯參政傅友德俱  
以兵會○上遣使諭元將擴廓帖木兒曰昔帝王之得天下當大功  
垂成之際尤必廣示恩信雖素相仇敵者亦皆收而並用之所以法  
天地之量而成混一之業也朕自起兵淮右收攬群雄平定華夏惟  
西北邊備未撤蓋以爾守孤城保其餘衆遠處沙漠朕甚念之是用  
特與湔滌示茲至懷必能知時達變慨然來歸其部下將帥及各部  
流移軍士多我中土之人果能革心從順文武智謀當一一用之有

願還鄉者聽其賀宗哲孫翥趙恒等朕悉涵容皆所不計投機之會  
間不容髮朕言不再其審圖之○大將軍徐達聞賀宗哲由六盤山  
遁去遣都督副使顧時右丞薛顯參政傅友德將騎萬人追之



卷四十五

洪武二年九月壬辰朔

大將軍徐達師至平涼左丞何文輝自宜祿來會時達受勅將還京師遂以指揮孫某與指揮余思明朱祐等同守平涼命都督副使顧時將騎兵略靖寧州以文輝守潼關繼又以指揮韋正守臨洮命斷事嚴某知開城州而以前州判馬思忠同治州事

甲午

賀宗哲以其衆掠蘭州大將軍徐達遣右副將軍馮宗異率步騎萬七千道靖寧往擊之宗哲聞王師至即由迭烈巡渡河遁去宗異乃率所部還

乙未

故元莊浪州宣差老關篤堅詣大將軍降達命篤堅仍權知州事

丁酉

故元降將汪靈真保張虎都帖木兒與其族屬自北京來朝初汪氏自金時世守鞏昌至元時授便宜都總帥及大將軍下鞏昌汪靈真保與虎都帖木兒歸附安置北京至是入覲詔賜冠帶襲衣衾褥及文幣二十疋素紬二十疋帛四十疋綿二十斤既而又賜白金人二百兩米六十石文幣各十疋仍以紬絹衣服皮襖靴鞮賜其從人

辛丑

大將軍徐達御史大夫湯和發平涼還京師右副將軍馮宗異總制軍事



卷四十六

洪武二年冬十月辛卯

是月遣使書元主曰朕本布衣昔在田里賴承平之樂忽妖人倡亂海內鼎沸當是時出師者將非不勇兵非不衆城廓非不堅器械非不利終無成功妖人愈熾遂致豪傑並起此天運昭然不言可見朕因群雄擾攘不能自寧由是爲衆推載乘時渡江撫建業之民待天下之清柰何君不能控御致將帥各懷不軌外爲元臣內實自謀靡有戡定禍亂以安生民者朕靜觀群雄割據荼毒生靈於心不忍乃親率諸將西平湖湘漢沔南取交廣東定吳越八閩兩江皆入版圖方欲息兵以觀君之爲計而君之將臣曰張曰李曰王三人者不爲國謀分據秦晉互相讐殺民遭塗炭朕乃命大將軍自前歲出師由齊魯經河洛次及燕城我師未至君已棄宗社而去朕謂君自知胡

無百年之運能順天道歸我中國故土上策也未幾邊將來報君率殘兵留連開平朕思君前日宗社尊安國用富實尙不能削平羣盜今以孤兵自隨遠寄沙漠若欲效漢之匈奴唐之突厥出沒不常以爲邊患是君之計不審也方今中國封疆盡爲我有全二千城之富庶握群雄累歲之勁兵華夏已平外夷咸附壯士無所施其勇智將無所用其謀而君乃欲與我爲敵乎君若不思保境土以存宗祀而欲吐餘燼于寒灰是不知天命也朕發鐵騎四出塞外精兵百萬聯陣二千餘里直抵陰山之北卽君遁逃亦出僥倖春和日煖沙漠草青漢兵出塞之時也霜雪冬寒則歸而守險君雖有百萬之衆何能爲哉朕誠心待人明示機策使君聞之庶幾改圖易慮安分順天以存宗祀不亦善乎君其審之



卷四十七

洪武二年十一月丁未

遣元平章長壽等以書諭元丞相也速曰將軍元之故家父子出將入相宣力王室積有年矣比者天下多故諸將擅兵類多跋扈往往不善其終獨將軍恪守臣節堅如金石雖當顛沛之際力奮孤忠志安宗社及元主遠去沙漠將軍獨能以孤軍殿後義氣不衰其餘僥倖之徒俱雲逝鳥散嗟哉且古之將帥當亂亡之時未嘗不假名義以行其私朕於將軍之節甚有嘉焉近聞塞外逋逃之衆猶逞蜂蠆之餘毒擾我邊陲豈將軍不能輯士而致然歟今我軍已集幽薊待釁而動將軍宜深思之上以圖存其君之宗祀下以保全其民人豈不識時之俊傑哉茲遣長壽篤馬二平章賫書往達朕意將軍其審之

十二月戊辰

平章李文忠以所俘脫列伯等獻京師上曰彼亦爲其主事敗至此情有可矜其釋之仍賜冠帶衣服

辛巳

征虜右副將軍都督同知馮宗異等至京初宗異守平涼以關陝既平胡虜畏服不請於朝輒引衆還及見上詰之曰將軍在平涼外禦胡虜內鎮撫關中國家所託非輕也乃不俟命輒引衆還闕外之事將誰任之宗異頓首謝上以其勳舊姑置之

庚寅

元將王保保偵知大將軍南還以兵襲於蘭州奄至城下指揮張溫會諸將校曰彼悉衆襲我我兵寡難與爲敵然彼遠來未知我衆寡乘暮擊之可以挫其鋒彼不退則固守以待援於是整兵出戰保保



兵稍却遲明溫收兵入城敵兵遂圍城數重溫堅守不與戰時鷹揚衛指揮于光守鞏昌將兵來援至蘭州之馬蘭灘卒遇保保兵戰敗被執至蘭州城下使呼張將軍出降光大呼曰我不幸被執公等堅守徐總兵將大軍行至矣敵怒批其頰遂被害城中聞光言守益固保保進攻不利且懼大軍至乃引去

卷四十八

洪武三年春正月辛卯朔

置鞏昌平涼二衛指揮使司

癸巳

上以王保保爲西北邊患復命右丞相信國公徐達爲征虜大將軍浙江行省平章李文忠爲左副將軍都督馮勝爲右副將軍御史大夫鄧愈爲左副副將軍湯和爲右副副將軍往征沙漠上問諸將曰元主遲留塞外王保保近以孤軍犯我蘭州其志欲僥倖尺寸之利不滅不已今命卿等出師當何先諸將皆曰保保之寇邊者以元主猶在也若以師直取元主則保保失勢可不戰而降也上曰王保保方以兵臨邊今捨彼而取元主是忘近而趨遠緩急之宜非計之善吾意欲分兵爲二道一令大將軍自潼關出西安擣定西以取王保



保一令左副將軍出居庸入沙漠以追元主使其彼此自救不暇應  
援况元主遠居沙漠不意吾師之至如孤豚之遇猛虎取之必矣事  
齊一舉而兩得者此是也諸將皆曰善遂受命而行  
癸卯

元將王保保駐兵安定縣之西巉先是入侵蘭州城中堅守保保兵  
無所得而去至是乃縱遊兵四出虜掠民頗被其擾

卷四十九

洪武三年二月乙酉

指揮金朝興取東勝州獲元平章荆麟等十八人

戊子

是月左副將軍李文忠率師至興和元守將舉城降復進兵察罕腦  
兒遂擒元平章竹貞



卷五十

洪武三年三月壬子

都督同知汪興祖克武州朔州獲元知院馬廣等六百三十四人家屬三千三百七十九口

戊午

大將軍徐達師至定西王保保退屯車道峴既而達進兵沈兒峪遣左副將軍鄧愈直抵保保壘立柵以逼之上遣使諭大將軍徐達等曰乃者大軍西征術者言當有水警將軍宜慎防毋忽凡軍士駐營臨陣須相度地宜以備不虞中原迤西山川阨塞一或遇雨暴水卒至勢不可測昔唐裴行儉晝駐軍平川暮復移於高阜人莫解其意其夜平川水溢丈餘而軍營無患此其驗也將軍其慎之

卷五十一

洪武三年夏四月甲子

禁蒙古色目人更易姓氏詔曰天生斯民族屬姓氏各有本源古之聖王尤重之所以別婚姻重本始以厚民俗也朕以布衣定群雄爲天下主已嘗詔告天下蒙古諸色人等皆吾赤子果有材能一體擢用比聞入仕之後或多更姓名朕慮歲久其子孫相傳昧其本源誠非先王致謹氏族之道中書省其告諭之如已更易者聽其改正

丙寅

大將軍徐達等率師出安定駐沈兒峪口與王保保隔深溝而壘日數交戰王保保發兵千餘人由間道從東山下潛劫東南壘東南一壘皆驚擾左丞胡德濟倉卒不知所措達親率兵急擊之敵乃退遂斬東南壘指揮趙某及將校數人以徇軍中股栗明日整衆出戰諸



將爭奮莫敢不力遂大敗保保兵于川北亂塚間擒元郟王文濟王及國公閻思孝平章韓扎兒虎林赤嚴奉先李景昌察罕不花等官一千八百六十五人將校士卒八萬四千五百餘人獲馬萬五千二百八十餘匹橐駝驪驢雜畜稱是保保僅與其妻子數人從古城北遁去至黃河得流木以渡遂由寧夏奔和林達遣都督郭英追至寧夏不及而還以德濟失律械送京師保保至和林愛猷議理達臘復任以事

己巳

遣使賈書與元主曰前者二次遣使致書久而未還豈被留而然歟以予計之殆君之非謀也君之意必曰吾常爲天下主以四海爲家彼昔吾之民耳豈可與通問乎自常情言之固宜以理勢論之則大不然君者天下之義主願天命人心何如耳蓋天命之去留由民心

之嚮背古語云民猶水也君猶舟也水能載舟亦能覆舟君豈不知此而乃固執不回乎今日之事非予所欲實以四方兵爭所在紛擾予當其時不能自寧于鄉里豈有意于天下乎及群雄無所成而予之兵力日以強盛勢不容已故有今日此誠天命非人力也君又何致怨于其間耶君其奉天道順人事遣使通好庶幾得收養於近塞藉我之威號令其部落尙可爲一邦之主以奉其宗祀若計不出此猶欲以殘兵出沒爲邊民患則予大舉六師深入沙漠君將悔之無及矣近北平守將以雲州所獲平章火兒忽荅右丞哈海等八人至京詢之皆君倚任之人是用待以不死今再令賈書詣前惟君其審圖之

丁丑

置蘭州衛



戊寅

上遣使勅諭大將軍徐達曰爾將兵在外軍中事宜與諸將佐熟計行之凡調發守備計定謀合當卽區處毋事狐疑蓋謀事宜審行事宜決近聞甘肅一路守兵甚少當量勢調撥以守之其吐蕃興元就調兵收取二處平後大軍出漢江順流東下亦甚利也凡獲牝馬悉發臨濠牧養所俘王保保部從及敗而來降者今從伐蜀蜀平就留以守禦可也

卷五十二

洪武三年五月丁酉

左副將軍李文忠左丞趙庸敗元太尉蠻子平章沙不丁朶兒只八刺等于白海子之駱駝山遂進次開平元平章上都罕等降○都督孫興祖及燕山右衛指揮平定大興左衛指揮龐禪等兵次三不刺川遇胡兵力戰皆歿于五郎口海寧衛指揮副使孫虎率兵至落馬河與元太尉買驢戰死之

辛丑

左副將軍李文忠師趨應昌未至百餘里獲一胡騎問之曰四月二十八日元主已殂今自應昌往開平報國喪文忠卽督兵兼程以進癸卯復遇元兵與戰大敗之追至應昌遂圍其城明日克之獲元主嫡孫買的里八剌并后妃宮人暨諸王省院達官士卒等并獲宋元



玉璽金寶一十五宣和殿玉圖書一玉冊二鎮圭大圭玉帶玉斧各一及駝馬牛羊無算遣人俱送京師惟太子愛猷識理達臘與數十騎遁去文忠親率精騎追之至北慶州不及而還師過興州遇元將江文精等率軍民三萬六千九百餘人來降至紅羅山又降其將楊思祖等一萬六千餘人師還北平遣人送江文清楊思祖等赴京師辛亥

大將軍徐達與都督馮勝參政傅友德左丞李思齊自徽州南出一百八渡至略陽擒元平章蔡琳遂入沔州又遣裨將金興旺張龍由鳳翔入連雲棧合兵攻興元興元守將劉思中知院金慶祥迎降達留興旺龍鎮守還軍西安

卷五十三

洪武三年六月壬申

左副將軍李文忠捷奏至時百官奏事奉天門聞元主殂遂相率拜賀上曰元主守位三十餘年荒淫自恣遂至于此因謂治書侍御史劉炳曰爾本元臣今日之捷爾不當賀也因命禮部榜示凡北方捷至曾仕元者不許稱賀既又以元主不戰而奔克知天命諡曰順帝癸酉

中書省以左副將軍李文忠所奏捷音榜諭天下上覽之見其有侈大之辭深責宰相曰卿等爲宰相當法古昔致君於聖賢何乃習爲小吏浮薄之言不知大體妄加詆誚况元雖夷狄然君主中國且將百年朕與卿等父母皆賴其生養元之興亡自是氣運于朕何預而以此張之四方有識之士口雖不言其心未必以爲是也可卽改之



○左副將軍李文忠遣人送所獲故元諸孫買的里八剌等及其寶冊至京師省臣楊憲等請以買的里八剌獻俘于廟寶冊令百官具朝服進上曰寶冊貯之庫不必進也古者雖有獻俘之禮武王代殷曾用之乎憲曰武王事殆不可知唐太宗嘗行之矣上曰太宗是待王世充若遇隋之子孫恐不行此禮元雖夷狄入主中國百年之內生齒誥繁家給人足朕之祖父亦預享其太平雖古有獻俘之禮不忍加之只令服本俗衣以朝朝畢賜以中國衣冠就令謝復謂憲曰故國之妃朝于君者元有此禮不必效之亦令衣本俗服于中宮朝見見畢賜之中國服亦令就謝

乙亥

買的里八剌朝見上皮辨服御奉天殿百官具朝服侍班侍儀司引買的里八剌具本俗服行五拜禮至東宮見皇太子四拜百官便服

侍班朝畢賜之衣冠買的里八剌母及妃朝見坤寧宮命婦具冠服侍班朝畢供賜以中國服乃賜第宅于龍光山命優其廩餼封買的里八剌爲崇禮侯誥曰昔帝王之有天下必封前代子孫使作賓王家其來尚矣曩因元失其政四海分爭朕以武功削平群雄混一區宇爲天下主而買的里八剌實元之宗孫比者遣將北征爾祖已殂既克應昌爾乃來歸朕念帝王之後爰稽古制錫以侯封爾其夙夜恭慎稱朕優禮之意上謂省臣曰朕見前代帝王革命之際獲其后妃往往不以禮遇欺孤虐寡非盛德所爲朕甚不取今元脫忽思后在此北狄但知食肉飲酪且不耐暑其飲食居第務適其宜若其欲歸當遣還沙漠

丙子

以獲買的里八剌祭告天地于圓丘翌日告太廟○都督同知汪興



祖與指揮常守道率兵至大同北口與元將速哥帖木兒等戰大敗其軍斬馘無算獲王保保弟金剛奴平章朱真等四百餘人  
丁丑

頡平定沙漠詔于天下詔曰朕本農家樂生于有元之世庚申之君荒淫昏弱紀綱大敗由是豪傑並起海內瓜分雖元兵四出無救於亂此天意也然倡亂之徒首禍天下謀奪土疆欲爲王伯觀其所行不合于禮故皆滅亡亦天意也朕當是時年二十有四盤桓避難終不寧居遂託身行伍驅馳三年覩群雄無成徒擾生民乃率衆渡江訓將練兵奉天征討于今十有六年削平強暴混一天下大統既正民庶皆安而元之遺孽時犯邊場勞我師旅今年六月十有五日左副將軍李文忠左丞趙庸等遣使來奏五月十六日率兵北至應昌獲元君之孫買的里八剌及其后妃寶冊等物知庚申君已于四月

二十八日殂于應昌大軍所至朔庭遂空中書上言宜以其孫及后妃獻俘于太廟朕心思之其君之亡係乎天運所遺幼孫若行獻俘實有不忍况當天下紛亂朕非有意不過欲救患全生今定四海休息吾民于田里非朕所能亦天運致然也尙慮臣民未知朕意是用播告天下左副將軍以禮護送買的里八剌已至朕憐帝王之後難同庶民及首亂僭僞來降者特封崇禮侯總其眷屬以及母后等同居飲食服用出官民上俾存元祀體法前王不敢過虧嗚呼天命靡常惟殷是鑒可不畏哉仍遣使賈詔諭安南高麗占城○是日百官上表賀上諭之曰卿等試言元之所以亡與朕之所以興劉基進曰自古夷狄未有能制中國者而元以胡人入主華夏幾百年腥羶之俗天實厭之又况末主荒淫無度政令隳壞民困于貪殘烏得而不亡陸下應天順人神武不殺救民于水火所向無敵安得而不興上



曰當元之季君宴安于上臣跋扈于下國用不經征斂日促水旱災荒頻年不絕天怒人怨盜賊蠡起群雄角逐竊據州郡朕不得已起兵欲圖自全及兵力日盛乃東征西討削除渠魁開拓疆宇當是時天下已非元氏有矣向使元君克畏天命不自逸豫其臣各盡乃職罔敢驕橫天下豪傑曷得乘隙而起朕取天下于群雄之手不在元氏之手今獲其遺胤朔漠清寧非天之降福何以至此詩曰商之孫子其麗不億上帝既命侯于周服天命如此其可畏哉○上遣使詔諭元宗室部落臣民曰自古天生聖人主宰天下立法創制以安生民三代漢唐之君姑置不言且以近代論之若宋創業之君能行善政其民樂生故天祐之厥後子孫微弱疆土日削故天命爾元世祖代之至妥歡帖木兒爲君荒淫昏懦不思政理不恤民艱故奸兇並起天下大亂生民無主朕時不忍荼毒于是起兵救民豪傑之慕義

者相率來歸剪暴除殘平定四海乃推戴朕爲皇帝國號大明此天祐朕躬故成功之速若是也朕卽位之初遣使往諭交趾占城高麗等諸國咸來朝貢奉表稱臣唯西北阻命遏師朕未遣使降詔者以庚申君尙擁衆應昌故耳乃者命將西征直抵吐蕃偏師北伐遂克應昌元君既殂太子愛猷識理達臘知天命既去人力難爲望風遁逃遂獲其孫買的里八剌至京朕憐帝王之裔爵封爲侯俾與其母妃同居賜以第宅給以衣食以奉元祀超乎臣民之上今又遣官尋訪愛猷識理達臘若能敬順天道審度朕心來撫妻子朕當效古帝王之禮俾作賓我朝其舊從元君倉卒逃避者審識天命傾心來歸不分等類驗才委任直北宗王駙馬部落臣民能率職來朝朕當換給印信還其舊職仍居所部之地民復舊業羊馬孳畜從便牧養朕有天下物產之富貢賦之入軍國爵賞之費取用不竭豈需爾沙漠



荒落之地哉特以元君之子孫流離失所一有不虞則朕恐失古人興滅繼絕之意俾爾人民無所歸往故遣使徧諭朕意朕既爲天下主華夷無間姓氏雖異撫字如一爾等無或執迷以貽後悔其邊塞韃靼百姓因元喪亂征繇繁重供億勞苦朕甚憫焉詔書到日悉安所居無自驚擾以廢耕牧

戊寅

故元四大王寇大同武州太原衛指揮桑桂等擊走之四大王者元之宗室也初大軍克元都遁入太原靜樂岢嵐山中聚衆結寨自固至是寇武州劫殺人民桂與指揮鄭亨率兵擊之追至牛尾莊四大王遁走獲其三大王脫忽的帖木兒送京師

卷五十四

洪武三年秋七月丙申

故元參政脫火赤等自忙忽灘來歸詔賜冠服置忙忽軍民千戶所隸綏德衛以脫火赤爲副千戶仍賜襲衣靴鞮銀椀諸物及其從人衣服有差

乙巳

命戶部增故元威順王妻子及三大王力只哈帖木兒家屬脫火思公主等月給糧米

丙辰

賜崇禮侯買的里八剌母妃以下鍍金銀首飾凡六十副副九事紗羅布衣服凡六十襲襲七事



卷五十五

洪武三年八月乙丑

上命中書省臣賜崇禮侯買的里八剌及威順王妃等家人薪米量其家口多寡通一歲之費併以給之

丙寅

置朔州衛○故元高昌王和尚岐王桑哥朶兒只班以其所部來降乙酉

胡軍火尙失蘭歹等至大鹽池殺守禦官齊拜舍等慶陽千戶孟德率兵擊敗之獲其參政梁咬住等

卷五十六

洪武三年九月己丑

故元宗王札木赤指揮把都百戶賽因不花等一十一人自官山來降詔中書厚加燕勞立官山等處軍民千戶所以把都爲正千戶賽因不花等三人爲百戶賜以文綺銀碗衣服有差就大同給賜田宅戊申

故元降將江文清楊思祖等至京詔以文清爲千戶思祖爲衛鎮撫賜賚甚厚其將校八百五十人皆賜綺帛各一仍遣思祖等還招其部曲上諭之曰歷代興廢天運之常爲人臣當其時衝冒危難欲全身家者蓋鮮矣元運之衰天下皆亂爾朔方將校歿身於兵戈者不知其幾爾獨出搶攘之中卒復保全今又自遠來歸可謂能識廢興之機今授爾世襲鎮撫遣還招部曲諭使來歸若能竭誠效力朕當



益隆恩待其蒙古有願來附者卽令詣邊將送至京朕皆有以處之  
思祖對曰臣苟全性命於亡國之餘進退無所委身來歸蒙被恩寵  
實出望外臣敢不竭力以圖補報惟陛下哀憐之○賜崇禮侯買的  
里八刺馬羊豕各一俾祭其祖

卷五十七

洪武三年冬十月辛巳

遣使致書元太子愛猷識里達臘曰君之將擴廓帖木兒自太原奔  
潰後以烏合之衆犯我蘭州大軍進討追至定西今年四月七日大  
敗其衆斬馘無算生擒嚴奉先韓札兒李景昌察罕不花等惟擴廓  
帖木兒遁去已命將追捕旦夕必就擒近綏德衛擒送平章撒里帖  
木兒聞知爲君舊用之人特令賈書致意進退之宜君其審之旣而  
復致書曰今年夏偏師至應昌遇君之子買的里八刺及宮眷諸從  
人馬遂與南來因念令先君審察天命不黷兵戰委順北歸其知幾  
者歟奄棄沙漠深可悼憫適元史告成朕以爲三十餘年之主不可  
無諡以垂後世用諡君先君曰順已著爲紀君之子買的里八刺亦  
封崇禮侯歲給祿食及其來者與之同居無恙但不知君之爲况何



如北方諸部人民亦果能承順如往昔乎去年冬二次遣官齎書令遺先君使者久而未還予故以此爲令先君之失計也前事之失茲不必較今再致書以嘗告令先君者告君君其上順天道遣使一來公私通問庶幾安心牧養於近塞藉我之威號令部落尙可爲一邦之主以奉其宗祀若不出此猶欲以殘兵出沒爲邊民患則大舉六師深入沙漠君之退步又非往日可比其審圖之毋貽後悔餘不多及

卷五十八

洪武三年十一月壬辰

征虜大將軍中書右丞相信國公徐達左副將軍浙江行中書省平章李文忠等師還至龍江車駕出勞於江上達等奉車駕還宮明日率諸將上平沙漠表上御奉天殿皇太子親王侍百官朝服陪列達奉表賀表曰乾坤宣五德之運曆數在子一人帝王開萬世之基功業超於百代干戈載戢文軌旣同欽惟皇帝陛下聖神合德文武成能天命所歸人心攸戴拯黎民於塗炭布霖雨於焦枯奮六師而江漢奠安楊九伐而荆吳底定旋收淮甸遂略中原齊魯十二之山河兼旬俱下幽薊百年之腥穢一旦廓清旣驅氈毳之群遂復衣冠之治何我師之奏凱而彼孽之再萌揜兇鞫頑敢寇攘於邊鄙乘間抵隙乃賊害於忠良蜂蠆之毒豈可復遺熊羆之師烏容不舉是用祇



承明詔恭行天誅以今年夏四月師至定西之北逼虜營而築壘出峪口以陳兵將校懷敵愾之心士卒奮超乘之勇震驅電擊渠兇棄甲而遁逃獸駭禽驚虜衆望風而降附吐蕃袍罕列障土崩忙忽高昌群酋面縛山川爲之震耀草木爲之昭蘇壺漿以迎無思不服幅員之廣有德必歸臣等仰遵廟算之成幸獲大勳之集治平有象適遭千載之期功德難名願祝萬年之壽文忠表曰日月麗中天萬國仰照臨之德乾坤大一統群生荷覆載之恩文教誕敷而治具畢張武威繼揚而妖氣頓息臣民欣載海宇歡騰欽惟皇帝陛下卓冠群倫茂膺景運皇圖啓祚粵申命之自天曆數在躬遂化家而爲國拯生民之墊溺救亂世之勸勸大鈞播而品物亨皇極建而彝倫叙凡有血氣莫不尊親惟彼殘胡敢有肆毒竊乘間隙侵犯邊陲赫怒皇心用加天討爰聲罪而致伐乃鞫旅以陳師臣文忠賦質庸愚托屬

外戚忝受副將之寄慚無贊畫之能拜命闕庭俾率熊羆之衆總戎行陣誓空胡馬之群前茅度關而興和之將卽降後騎出塞而駝山之兵旋歟進開平而乘破竹之勢克應昌而奮覆巢之威皇子后妃兩宮之貴人俱獲玉璽金冊歷代之重器全收皇風遠被於遐荒胡運竟終於此日凡茲勳庸之建豈因臣下之能茲蓋伏遇皇帝陛下廣運加天宏謨蓋世明見萬里之外遂成千載之功東日窟而西月氏莫非王土南炎荒而北瀚海共惟帝臣一統太平萬年悠久是日禮成達等退自西階皇太子親王入行賀禮訖中書省左丞相李善長率文武百官上奉賀又明日以武成告于郊廟命大都督府兵部錄上諸將功績吏部定勳爵戶部備賞物禮部定禮儀翰林院撰制誥以封功臣

丁酉



詔禮部考定元降臣高昌王岐王陪祭禮儀尙書陶凱等言謹按唐諸蕃酋長在朝陪祭班於蕃客位宋降王李煜劉鋹陪祭各依所授官職立班今岐王高昌王既未授名爵宜借三品法服隨班陪祭從之

卷五十九

洪武三年十二月戊午

中書省臣言西北諸虜歸附者不宜處邊蓋夷狄之情無常方其勢窮力屈不得已而來歸及其安養閑暇不無觀望於其間恐一旦反側邊鎮不能制也宜遷之內地庶無後患上曰凡治胡虜當順其性胡人所居習於苦寒今遷之內地必驅而南去寒涼而卽炎熱失其本性反易爲亂不若順而撫之使其歸就邊地擇水草孳牧彼得遂其生自然安矣

癸亥

故元主之子失篤兒國舅阿里麻思海牙駙馬忙哥刺失等來降詔各賜第宅○遣使致書元太子并招諭和林諸部  
戊辰



延安衛指揮李恪綏德衛指揮朱明等追敗故元殘兵於燕山只斤禽獲五百餘人又攻阿不刺思寨獲馬三百餘匹

卷六十

洪武四年春正月壬寅

賜故元臣禿魯書曰大明皇帝詔問元臣禿魯近者聖保自爾營中歸云爾敢執持其志將欲有爲此大丈夫之事朕甚有取焉但以爾之所處度之所不成者有四且又將不得其死何以見之爾素爲元臣累效力王家釁隙一生君臣間隔已將三年以人臣論之君有難爲臣者不衛君而自處利便果臣耶逆耶此不成一也方今元運已終天命不留幼君昏弱而邪正莫知爾若不離左右非爲讒人所殺幸矣今流竄遠方將何所圖此不成二也孤處沙塞步騎不滿數萬部下之人口無充腹之食體無禦寒之服人將離散而爾不能獨居將何恃乎此不成三也若嚴號令律士卒使飢寒逼身不敢旋足人情不堪朕又恐爾爲部下所謀此不成四也犯是四者而猶徘徊顧



戀可謂不知機者此朕知爾不得其死明矣當此之時身名俱泯忠順兩亡甘與秋草同腐終爲小人之歸雖欲悔之蓋亦晚矣若省朕所言自度力有不及他無所往則誠心來歸待爾之意必不薄也爾其思之餘不多及

癸卯

故元樞密都連帖木兒等自東勝州來降詔置失寶赤千戶所一百戶所十一五花城千戶所一百戶所五斡魯忽奴千戶所一百戶所十燕只千戶所一百戶所十瓮吉刺千戶所一百戶所六以都連帖木兒劉朶兒只丑的爲千戶給三所印人賜文綺帛一疋金繡盤龍衣及文綺錦衣銀椀靴韉有差復遣侍儀司通事舍人馬哈麻齋燕只瓮吉刺千戶所印二往東勝州命伯顏帖木兒答海馬里卜蘭歹也里沙朶列圖闊濶歹爲千戶賜文綺帛人十二疋銀椀一官屬

卜顏帖木兒等四十三人賜文綺帛人八疋特賜都連帖木兒之父闊々帖木兒銀椀一文綺帛十疋



卷六十二

洪武四年三月戊子

武靖衛指揮同知卜納刺率舊所部官屬入朝貢馬賜文綺三十疋官屬亦各賜有差時故元宗王子任八隔巴亦從入朝上命禮部日給廩餼馬給芻豆以優禮待之

己亥

命故元宗王子任八隔巴從卜納刺西還賜文綺衣一襲

癸丑

是月故元院判劉原利副樞張時用平章郭伯通等既降聞四大王聚衆岢嵐山中欲攻太原之謀相應爲亂伯通入城中爲內應原利等率衆從外起軍士林旺等覺其謀密以告指揮桑桂桂領兵捕伯通復收原利等斬之

卷六十四

洪武四年四月辛亥

故元降將知院白文顯聚衆於華亭縣作亂平涼衛指揮秦虎以兵討平之



卷六十五

洪武四年五月丙寅

大同衛奏故元平章魁的斤與其兄知樞密院事帖木兒等十四人率其部屬千餘自東勝塔灘之地來降命魁的斤入朝

卷六十六

洪武四年六月戊申

賜故元臣驢兒書曰三月間祭罕帖木兒火者歸言將軍駐于長峪又將移營東北然將軍果能修身事爾幼主乃世間之美事忠臣之道人所共願者朕恐爾事有不諧入人彀中爾之志何以暴白當此之時忠不能顯反受奸惡之名惜哉今爾所守封疆與朕邊將旌旗相望甚不相遠若不通一介之使則恐將軍他日進退兩難丈夫於世似乎無機若通信使進退自由則有無窮之樂如不從朕言他日幼主一失其所群臣中强者自立弱者從之將軍能忘君以事讎乎名儀所在含耻忍辱諒不爲也不然必將驅兵以嚮之苟力不足麾下士卒一旦解體轉而他之必將自死人手妻子離散又何益哉若能通使進退在我豈能成大丈夫之智耶將軍聽朕所諭幡然改悟



結我以善後他日遇難來依朕不食言

卷六十七

洪武四年秋七月辛亥朔

遣使命中書右丞相魏國公徐達自北平往山西操練士馬諭之曰  
凡爲國者貴有備有備則無患古人當平康之時克詰戎兵內以安  
國家外以制四夷况山西地近胡虜尤不可無備故命卿帥諸將校  
繕修城池訓練士卒如調遣征進迤西等處從便行之其太原蔚朔  
大同東勝軍馬及新附韃靼官馬悉聽節制

戊辰

故元詹事院副使南木哥詹事丞朶兒只自河西率兵民二千餘人  
來降

辛未

淮安侯華雲龍統兵至雲州偵知故元平章僧家奴營于牙頭夜分



精兵襲之突入其營擒僧家奴盡俘其衆并獲駝馬四百餘匹而還  
壬申

故元甘肅行省平章阿寒栢等至京師先是阿寒栢等率所部官屬  
兵民來降陝西守臣以聞詔阿寒栢與其官屬四十四人入朝其兵  
民留居寧夏至是上命中書省賜阿寒栢及知院滿答刺廉訪使納  
速爾丁人衣一襲綺帛八疋米五石錢五千其左丞觀音奴等四十  
一人賜綺帛錢米有差

庚辰

大同官山千戶所百戶速哥帖木兒捏怯來等詐言故元將王保保  
率兵至上都遂謀叛殺其千戶把都等事覺伏誅

八月辛巳朔

賜故元平章阿寒栢知院滿答刺廉訪使納速爾丁等四十四人羅

綺有差尋又賜以冠帶

庚寅

罷鞏昌故元總帥府以總帥汪靈真保爲鞏昌衛指揮同知張虎都  
帖木兒爲僉事初靈真保虎都帖木兒之降也俾仍舊職至是罷帥  
府改今官

癸卯

故元宗王子巴都麻失里沙加失里院使汪家奴等來降貢馬二十  
匹及獻鎧甲器仗上命中書省賜巴都麻失里沙加失里汪家奴及  
知院瑣南輦眞金繡衣人一襲文綺七疋平章孫讓等四人金繡衣  
一襲文綺五疋宣政副使海壽和尙馬兒等三十人文綺人三疋及  
衣靴僉事也失里等十人文綺人二疋儉從一百三人悉給綿布及  
綿戰襖



卷六十八

洪武四年九月辛亥

以故元降臣汪瓦兒間爲河州衛指揮僉事賜文綺襲衣瓦兒間仕元爲平章至是來歸故有是命

丙辰

冊故元太傅中書右丞相河南王王保保女弟爲秦王棧妃時妃有外王父喪上命廷臣議之禮部尙書陶凱奏大功以下雖庶人亦可成婚況王妃無服上遂令中使及女史往諭妃家行納徵發冊禮冊曰朕君天下封諸子爲王必選名家賢女爲之妃今朕第二子秦王棧年已長成選爾王氏昔元太傅中書右丞相河南王之妹授以金冊爲王之妃爾其謹遵婦道以助我邦家敬哉

冬十月丁未

故元知院小保司丞蠻子於忻州聚衆作亂官軍擒戮之



卷七十

洪武四年十二月丙戌

淮安侯華雲龍遣人送故元惠王伯都不花儲王伯顏不花宗王子蠻蠻伯帖木兒至京獻馬及金寶二金印一金字團牌九銀字團牌二上命賜伯都不花等第宅及帷幔裊褥什器之類亦賜以金繡之衣婦女亦賜首飾仍月給錢米有差惟和尚帖木兒及諸官屬尙留北平

戊戌

故元宗王子和尚帖木兒及伯都不花等官屬入朝獻馬駝三百餘匹上命所賜如伯都不花凡伯都不花等官屬知院四阿兒荅忽納歹脫脫合兒卜顏哈同知二伯顏不花月魯帖木兒副樞三可索羅察罕不花沙的僉院二阿魯完者帖木兒同僉二班秃奴圖赤脫脫

木兒囊加歹怯薛四馬木沙曲烈兒阿魯愛圖完者帖木兒王府官四八里顏脫脫八班可徹火里灰悉賜賚有差



卷七十一

洪武五年春正月庚戌

胡兵寇汾州大同衛指揮僉事蔡端追至葫蘆口擒獲八百餘人及孳畜以還上命處其人於近地老者贍以糧少者俾之牧馬其孳畜盡給還之

庚午

上御武樓與諸將臣籌邊事中書右丞相魏國公徐達曰今天下大定民庶已安北虜歸附者相繼惟王保保出沒邊境今復遁居和林臣願鼓率將士以勦絕之上曰彼朔漠一窮寇耳終當絕滅但今敗亡之衆遠處絕漠以死自衛困獸猶鬪况窮寇乎姑置之諸將曰王保保狡猾狙詐使其在終必爲寇不如取之永清沙漠上曰卿等必欲征之須兵幾何達曰得兵十萬足矣上曰兵須十五萬分三道以

進於是命達爲征虜大將軍出中路曹國公李文忠爲左副將軍出東路宋國公馮勝爲征西將軍出西路

甲戌

遣征虜大將軍魏國公徐達左副將軍曹國公李文忠征西將軍宋國公馮勝等率師征王保保上戒之曰卿等力請北伐志氣甚銳然古人有言臨事而懼好謀而成今兵出三道大將軍由中路出鴈門揚言趨和林而實遲重致其來擊之必可破也左副將軍由東路自居庸出應昌以掩其不備必有所獲征西將軍由西路出金蘭取甘肅以疑其兵令虜不知所爲仍善計也卿等宜益思戒慎不可輕敵達等遂受命而行



卷七十二

洪武五年二月丁未

大將軍徐達師至山西境遣都督藍玉先出鴈門於是玉軍進至野馬川遇胡寇追至亂山寇反兵接戰玉擊敗之

卷七十三

洪武五年三月辛亥

命禮部重定官民相見禮先是元俗官僚相見輒跪一足以爲禮拜則以叩頭爲致敬既拜復跪一足屬官下人見上司官長與爲禮卽引手于後退却若避之然上甚厭之自卽位之初卽加禁止然舊習不能盡革至是復定爲儀卽令頒示之

丁卯

都督藍玉兵至土刺河與王保保遇擊敗其衆保保遁去

五月壬子

大將軍徐達兵至嶺北與虜戰失利斂兵守塞



卷七十四

洪武五年六月戊寅

征西將軍馮勝左副將軍陳德右副將軍傅友德率師至甘肅故元將上都驢降初勝等師次蘭州友德先率驍騎五千直趨西涼遇元失刺罕之兵戰敗之至永昌又敗元太尉朶兒只巴于忽刺罕口大獲其輜重牛馬進至掃林山勝等師亦至共擊走胡兵友德手射死其平章不花追斬其黨四百餘人降太尉鎖納兒加平章管著等至是上都驢知大軍至率所部吏民八百三十餘戶迎降勝等撫輯其民留官軍守之遂進至亦集乃路元守將卜顏帖木兒全城降師次別篤山口元岐王朶兒只班遁去追獲其平章長加奴等二十七人及馬駝牛羊十餘萬友德復引兵至瓜沙州又敗其兵獲金銀印馬駝牛羊二萬而還

己丑

振武衛指揮僉事王常先等招集紅羅山故元將阿速所部軍士七千人來降

壬寅

上以征西將軍馮勝等師征甘肅命中書省臣預送戰襖三萬鞋六萬八千綱以給之因諭之曰甘肅苦寒未冬而雪非南方之比朕居京師每當隆冬時衣重裘尙覺體寒况軍士暴露邊庭衝冒風雪有列膚墮指之患豈能堪也衣鞋宜預給之

癸卯

征西將軍馮勝遣千戶胡凱至京奏甘肅之捷上召都督府臣諭以功賞次第指揮綵段五表裏千戶衛鎮撫四表裏百戶所鎮撫三表裏仍命勝先將吐蕃及西安河南出征官員就各處賞賜其京衛出



征將士俟回京給賞

甲辰

左副將軍李文忠率都督何文輝等兵至口溫之地虜聞之夜棄營遁獲其牛馬輜重無算遂進至哈刺莽來虜部落驚潰復進兵至臚胸河文忠諭將士曰兵貴神速宜乘勝追之千里襲人難以重負於是留部將韓政等守輜重命士卒人持二十日糧兼程而進至土刺河虜將蠻子哈刺章規知之悉騎渡河結陣以待文忠督兵與戰戰數合虜稍卻復進至阿魯渾河虜兵益衆搏戰不已文忠馬中流矢急下馬持短兵接戰從者劉義直前奮擊以身蔽文忠指揮李榮見事急以所乘馬授文忠自奪虜騎乘之文忠策馬橫槊麾衆更進於是士卒鼓勇皆殊死戰虜遂敗走獲人馬以萬計追至稱海虜兵又集文忠勒兵據險椎牛饗士縱所獲馬畜于野示以間暇居三日虜

疑有伏不敢逼乃遁去文忠亦引還夜行失故道至桑哥兒麻士卒無水渴甚文忠默禱于天忽所乘馬跪地長鳴泉水湧出人皆以爲天助云是役也宣寧侯曹良臣驍騎左衛指揮使周顯振武衛指揮同知常榮神策衛指揮使張耀俱戰沒



卷七十五

洪武五年秋七月丙辰

中山侯湯和等兵至斷頭山遇虜兵與戰不利平陽左衛指揮同知章存道死之  
己未

左副將軍李文忠以所獲故元官屬子孫及軍士家屬一千八百四十餘人送至京師上謂都督府臣曰故元官屬子孫不宜與軍士爲伍俾參隨指揮周龍有可用者量才用之軍士則令舊校李伯顏不花領之以隸羽林衛

卷七十六

洪武五年冬十月丁酉

韃靼五千九百餘人自東勝來降命居臨濠月以薪米給之○征西將軍宋國公馮勝等自甘肅班師至京

十一月壬子

置甘肅衛都指揮使司莊浪衛指揮使司

壬申

故元右丞朶兒失結會河州衛指揮徐景等領兵至西寧息利思溝閃古兒之地攻破故元岐王朶兒只班營朶兒只班遁去獲岐王金印一司徒銀印一及其士馬而還○是月詔征虜大將軍魏國公徐達左副將軍曹國公李文忠曰今塞上苦寒宜令士卒還駐山西北平近地以息其勞卿等還京



卷七十七

洪武五年十二月壬寅

遣使賫書與元幼主云書曰皇天無親惟德是輔此古今不易之大訓君其思之自古國家必有興廢以小事大理勢之常賢智者亦所樂行而不以為辱昔我中國趙宋將衰之際為金所逼遷都于杭納以歲幣其後金為君家所滅君家亦遣使于宋約納歲幣一如金時雖疆界有南北之分而前後延祚百五十年此小事大之明驗也且爾國之俗素無姓氏其族貴嫡而輕庶君乃高麗有姓者之甥又為庶出君何昧而不察固執不變朕觀前代獲他君子孫必獻俘廟社誇示國中其初亦有待之以恩授之以爵者及其後也非鳩即殺雖君家亦爾宋之幼主削髮為僧終不免於一死在朕則不然君之子至京師今已三年優待有加君宜遣使取歸何也朕本布衣生長君

朝承平之時混於民間猶勺水之下滄海一粟之在太倉豈有志於今日哉自辛卯盜起汝穎斬黃間君家天運已去人心以離四海土崩瓦解朕觀君父子國勢不振民罹荼毒始議興師保身救民一時群雄僭稱名號者盡為朕所俘虜雖君之父子亦不能守宗廟社稷北遁沙漠此天運也人力有不可為自古有識之君孰不畏天故特致書以達朕意君其察焉○又與元臣劉仲德朱彥德二生書曰昔者人臣致君以善愛君有終各有其道道各有方如趙宋事金安享富貴百五十年餘此無他處之各得其道也朕觀二生乃間氣所鐘古今如二生者僅數人耳何也至正之君蒙塵而崩幼主初立朝之大臣無不叛去獨二生竭力守護之誠可嘉尚今特遣使者諭爾君數事且令取其子買的里八剌歸二生宜察之毋教人絕父子之道蓋求忠臣者必於孝子之門也毋教人以偏強蓋小敵之堅乃大敵



之禽也若能再參察朕之言爾君之宗祀不絕二生之家族亦可長保富貴如其不然中國無事六軍出討旌旗蔽塞陣數百里繇亘於陰山二生若忠於君身膏草野美名垂於千載亦奇男子事也或不能狗國偷生苟免將何面目與朕相見惟熟慮之

卷七十八

洪武六年春正月壬子

命魏國公徐達曹國公李文忠等往山西北平練兵防邊上諭之曰處太平之世不可忘戰略荒裔之地不如守邊朕同卿等起布衣削群雄定禍亂統一中夏勤勞累歲至此無事可以少休然念向者創業之難及思古人居安慮危之戒終不敢自寧山西北平與胡地相接犬羊之群變詐百出倉卒有警邊地卽不寧矣卿等豈能獨安乎今無事之時正宜往彼練習軍士修葺城池嚴爲守備使邊境永安百姓樂業朝廷無西北之憂卿等亦可以忘懷高枕矣達等頓首曰陛下宵旰憂勤不忘武備所謂國家有道守在四夷臣等敢不恭命上復戒之曰禦邊之道固當示以威武尤必守以持重來則禦之去則勿追斯爲上策若專務窮兵朕所不取卿等慎之於是上親祭告



太歲風雲雷雨嶽鎮海瀆鐘山等神曰前古帝王治世安民制禮作樂典百神之祀動作必合於禮焉惟朕受天明命統一海宇以治安天下典百神之祀當力效前王去歲發將征討大興師旅于時失親告祭于神茲恆慊焉今又令大將軍魏國公徐達副將軍曹國公李文忠先至大同北平等處修理城池練兵訓將以備邊陲儻胡入來寇就令統兵力征以安中國今師再出特告神知達等比至池河召還乃命吉安公侯陸仲亨詣代縣都督何文輝詣北平代領其衆已未

置西寧衛以朶兒只失結爲指揮僉事朶兒只失結西寧人仕元甘肅行省右丞初王師下關陝與太尉朶兒只班在青海朶兒只班遣其來朝進馬上賜以襲衣文綺令還招諭其部曲朶兒只班不奉詔遁甘肅朶兒只失結自率所部二千餘人還西寧遣弟賈荅等赴京

言朶兒只班不奉詔之故及宋國公馮勝總兵征甘肅遂以所部從行勝乃命朶兒只失結同指揮徐景追襲朶兒只班獲其金銀印及軍士馬匹遣其弟荅立麻送京師至是立西寧衛命朶兒只失結爲指揮僉事

辛未

胡寇哈巴哈只寇會寧掠驛傳牛馬而去指揮林雄追擊之禽哈巴哈只送京師



卷七十九

洪武六年二月壬辰

胡兵寇永安之遷安縣殺知縣夏某掠居民孳畜永平衛指揮楊某督兵與戰死之指揮樊某復領兵來援虜引去追至董家口虜反兵接戰樊亦死之

壬寅

故元國公驢兒等復引兵寇遷安縣虜掠人民永平衛千戶李智率步騎追之斬獲甚衆餘兵潰去○故元將脫脫木兒犯慶陽保安會寧等處延安衛發兵擊走之○是月故元副樞失刺罕等寇慶陽之槐安寨殺百戶朱龍而去指揮楊政等率兵追擊敗之

卷八十

洪武六年三月壬子

命魏國公徐達爲征虜大將軍曹國公李文忠爲左副將軍宋國公馮勝爲右副將軍衛國公鄧愈爲左副將軍中山侯湯和爲右副將軍統諸將校往山西北平等處備邊上御奉天殿諭達等曰創業之初君臣同其艱難及事平之後豈不欲少與休息然居安慮危古人所慎故嘗命卿等往西北爲防邊之計旣行朕復思邊守旣定遠備勞兵乃召卿等還今聞胡人窺塞有入寇之意事不可已故再命卿等總率將士往鎮邊陲然夷狄豺狼出沒無常但保障清野使來無所得俟其情歸則率銳擊之必掩群而獲卿等老將臨機制勝之道熟矣非朕所能遙度至邊宜先圖上方略使朕覽之達等啓行



卷八十一

洪武六年夏四月己卯

賜故元太子沙加失里高麗布六匹文綺帛各四匹

辛丑

淮安侯華雲龍鎮守北平遣使言塞上諸關東自永平薊州密雲西至五灰嶺外隘口通一百二十一處相去約二千二百里其王平口至官坐嶺口關隘有九約去五百餘里俱係衝要之地並宜設兵守之若紫荊關及蘆花山嶺尤爲要路宜設千戶所守禦從之

卷八十二

洪武六年五月庚申

胡兵入寇武朔等州時大將軍徐達駐師臨清報至遣臨江侯陳德鞏昌侯郭子興率兵往擊之



卷八十三

洪武六年六月壬辰

故元將王保保遣兵寇鴈門據南北二山守關指揮吳均率衆拒之自卯至午我軍大呼曰援兵至矣衆皆勇躍欲戰胡寇聞之卽解去均遂追擊敗之

秋七月丙午

大將軍魏國公徐達分遣左副將軍李文忠濟寧侯顧時南雄侯趙庸穎川侯傅友德永成侯薛顯鞏昌侯郭子興臨江侯陳德營陽侯楊璟都督僉事藍玉王弼統騎兵右副將軍馮勝右副將軍湯和同南安侯俞通源永嘉侯朱亮祖宜春侯黃彬都督何文輝平章李伯昇都督僉事張溫等統步兵分駐山西北平等處相機擒討殘胡遣指揮李玉入奏詔可之

戊申

遣故元降臣盧道興等北還招諭太尉伯顏不花至虜中爲王保保弟脫因帖木兒所殺

己酉

都督僉事葉昇等領兵攻胡寇胡人匿懸聚洞以煙薰洞中死者甚衆生擒一百五十餘人昇上言宜加築東山彭陽平安三城以鎮邊境從之

乙卯

胡兵寇山西白登縣大同衛兵擊敗之生擒八十七人

戊辰

武靖衛指揮同知卜納剌卒命有司治其喪給殯葬之具卜納剌本蒙古部元世祖第七子西平王奧魯赤五世孫奧魯赤生鎮西武靖



王帖木兒不花帖木兒不花生搠思班搠思班生梁王脫班脫班生  
卜納刺襲封武靖王洪武三年王師駐河州卜納刺率吐蕃部衆詣  
征虜左副將軍鄧愈軍門欵附既而入覲上念其元裔甚恩遇之洪  
武五年授懷遠將軍武靖衛指揮同知子孫世襲至是卒  
己巳

武州知州周士廉言其州境切近胡地乞益兵守禦詔大將軍徐達  
量宜處置○洮州三副使阿都兒等以出獵聚衆約故元岐王朶兒  
只班寇邊朶兒只班等遂率衆駐大通山黑入城入寇河蘭二州西  
寧衛千戶祈者公孫哥等領兵擊之斬其知院滿荅立等百餘人千  
戶倫達力戰死寇遂解去

卷八十四

洪武六年八月丙子

胡兵寇河州夜入土門峽千戶王才戰死臨江侯陳德統兵擊敗之  
丁丑

故元左丞忽都等引衆屯天池山欲入寇太原衛指揮使常守道等  
提兵夜破其營斬忽都等獲其將校六十五人牛驢八十餘頭其衆  
遁去  
癸未

臨江侯陳德鞏昌侯郭子興進兵至荅刺海子口遇胡兵戰敗之斬  
首六百餘級生擒其同僉興都等七百餘人獲駝馬牛羊千餘頭餘  
衆潰去  
己丑



大同衛指揮王約率兵夜襲胡人之神仙寨破之執其平章定定以歸先是約遣游騎至石佛寺獲宣寧縣民間知定定所在乃以兵襲之獲其省都鎮撫閃忽魯別及民人牛驢孳畜甚衆

丙申

上以大將軍徐達等久出師遣使賈勅諭之曰凡賢人君子不以勤怠異其始終不以富貴忘其艱難卿等與朕平定天下勳業已成而瑣瑣殘胡不能盡討致連年出師勞民擾衆孰任其咎朕姑爲爾言之今駐師之處皆有房宇妻妾身雖在外實同家居一也肥馬輕裘縱意馳騁不知下人飢寒之憂二也燕樂玩愒因循苟且不能謀事三也軍士連年暴露被堅執銳朝夕不息意圖決勝爾又失算卒無成功四也昔田單攻狄久之不下問計於魯仲連仲連曰將軍在即墨時飲食起居與士卒同身先於事所以獲生而致勝今將軍東有

302785

夜邑之奉西有淄上之虞黃金橫帶馳騁乎淄繩之間有生之樂無死之心所以不勝也卿等皆起布衣一旦至此遂忘昔日之艱難豈不犯仲連之誚乎卿等宜益懋其功以副朕懷



卷八十五

洪武六年冬十月丙子

上以山西弘州蔚州定安武朔天城白登東勝豐州雲內等州縣北邊沙漠屢爲胡虜寇掠乃命指揮江文徙其民居于中立府凡八千二百三十八戶計口三萬九千三百四十九官給驢牛車輛戶賜錢三千六百及鹽布衣衾有差○大都督府奏太原衛官軍巡邊獲民從胡寇劫掠者三十九人請寘于法上曰邊民被胡寇抄掠因從其爲盜不得已也悉貸之徙于內地

辛巳

遣使諭左副將軍李文忠等曰自開創以來諸將勤勞風霜暴露久矣朕甚念之邇者胡兵寇邊遣大將軍達右副將軍勝及卿等將兵塞上以禦之今虜稍稍遁跡携貳之民亦已入塞欲命卿等俱還又

聞胡騎出沒不常邊備蓋不可撤也其令大將軍達副將軍勝冬盡還京卿與諸將且留山西訓兵養銳以備之

乙未

復遣使勅諭大將軍徐達等曰近聞王保保欲來求和必非實意其步將普賢奴乃兒不花魁的斤等各將人馬恐假此來擾我邊須多伏精兵盛爲之備索其情僞毋使失計近術士張鐵冠言子月有戰卿等未可卽還凡出入塞上必常遇敵非數千騎不可行也曠漠中如遇敵當加慎焉發出所獲當道驢盧國公之子至可撫諭而遣之



卷八十六

洪武六年十一月壬子

大將軍徐達等自朔州還至代縣聞王保保兵至大同北卽與左副將軍李文忠右副將軍馮勝率師往擊之至貓兒庄遇大雪退營鴈踏堡邏騎獲故元平章鄧季羅帖木兒誥之言懷柔有胡兵千騎達卽遣裨將領步騎三千掩捕之至三角村擒故元武平章康同僉獲馬八十餘匹而還

閏十一月壬辰

故元四大王寇岢嵐州命大同衛官軍討之已而千戶唐誠吉率兵於同丸溝椽方山捕獲其黨人哈刺張送京師斬之

乙未

遣使勅諭大將軍徐達等曰爾諸將屯軍塞上爲日頗久軍中動靜

王保保安得不知兵法云多算勝少算不勝况無算乎此確論也近有自軍中來者言王保保部下之卒有盜印詣軍門降者觀其來意甚篤然古之智將謀慮深長有鬼神不測之機朕竊爲將軍慮之爾所率步騎多王保保部屬當其來降實迫事勢非出誠心今隨爾往征其心有不可測當以誠待之宜亦以計隄防今王保保力勢雖微然多詐謀必籌之萬全而後動能不戰而屈之乃爲上智爾其勉之

十二月癸卯

胡兵寇永平之撫寧縣及瑞州大肆剽掠而去詔以瑞州逼近虜境宜罷州治遷其民于灤州徙武寧縣治于洋河西民之近邊者皆徙內地



卷八十七

洪武七年二月戊戌

故元和林國師朶兒只怯烈失思巴藏卜遣其講主汝奴汪叔來朝進表獻銅佛一舍利一白哈丹布一及元所授玉印一玉圖書一銀印四銅印五金字牌三詔禮部佛像舍利送佛寺賜汝奴汪叔文綺禪衣帽靴等物

癸亥

臨江侯陳德領兵於會寧等處獲韃靼元帥禿魯迷失等九十七人并其族屬及馬牛羊等物六安侯王志領兵於朔州等處獲韃靼一百餘人俱送至京師

卷八十八

洪武七年三月己丑

燕山都衛獲元故官及來降之人送至京中途有逃竄者上勅諭邊將曰元運既終天命歸我中華凡其遺民皆我赤子今既來歸又輒逸去蓋彼生長之日深而此撫綏之意淺故去之耳自今凡有來歸者爾等善撫綏之有欲就彼住者擇善地以居之便其畜牧有欲來京者擇善人以送之毋使失所

乙未

召右副將軍馮勝左副將軍鄧愈右副將軍湯和鞏昌侯郭子興入計邊務

夏四月己亥

都督僉事藍玉林霽峯率兵攻興和時故元將脫因帖木兒據興和



遣其國公帖里密赤迎戰玉等大敗其衆于白酒泉禽帖里密赤及其官屬五十九人獲馬駝三百三十餘匹脫因帖木兒棄城走遂拔興和

甲辰

左副將軍李文忠遣裨將至三不刺擒故元平章陳安禮木屑飛至順寧楊門斬其將眞珠驢至朔州又擒其太尉伯顏不花

甲寅

驍騎衛兵巡邏興和白登等處獲王保保所部省院官買納等四十三人送京師上以買納等十九人才可任用命官之其餘悉令編伍且賜其家屬衣服

丙辰

命宋國公馮勝衛國公鄧愈中山侯湯和鞏昌侯郭子興復鎮北邊

戊午

都督僉事金朝興胡海等率兵至黑城子等處獲故元太尉盧伯顏不花大司徒平章帖木兒不花等并省院官二十五人軍士四十九人河南都指揮使繆道復率兵於聖山兒等處擒故元參政等官民百餘戶而還



卷八十九

洪武七年五月庚辰

和林國師朶兒只怯烈失思巴藏卜及甘肅平章汪文殊奴等至京師國師獻佛像舍利及馬二匹詔以佛像舍利送鐘山寺賜國師文綺禪衣汪文殊奴等毳絲襲衣房舍供具諸物及賜從者衣服等物有差

卷九十一

洪武七年秋七月甲子朔

左副將軍李文忠率師攻高州大石岸克之斬故元宗王朶朶失里擒其承旨百家奴餘衆敗走文忠復遣指揮唐某追擊之至氈帽山遇故元魯王營于山下以兵攻之斬魯王及司徒荅海俊平章把剌知院忽都獲魯王妃蒙哥秃并金印一玉圖書一

辛未

永平衛百戶畢勝率兵至紅羅山巡邏獲故元同知楊普賢奴進至八角山遇田院判引兵接戰勝擊斬之

丁亥

設立察罕腦兒衛指揮使司以塔刺海等二人爲指揮僉事以來降副樞撒里荅歹爲衛鎮撫



卷九十二

洪武七年八月癸卯

遣使賜故元臣禿魯書曰上古君天下及名世者至今歷數興亡非止一人前者元失其馭群盜暴作君昏臣權天下鼎沸終不能定朕乃平之以致更元社稷鼎新治化今已七年中國頗安矣曩者兵戍北塞遣將安邊不期耿指揮好殺是致同人而異志乃有小雪干等畏死北往實朕用人不當非來叛者不誠今耿指揮已寘于法慮爾諸人未悉朕意昔者朕起布衣不過一族之師未有百萬之衆今也諸蕃入貢朕擅中國之富戍兵百萬軍民樂用以此觀之豈非朕之誠意可動神人乎爾聰明宜詳審於此天命所歸人不可強違去就之機惟達者識之故遣使記問餘不多及○故元國公乃兒不花遣人至大同言欲來降既而懼有侵邊之釁不果來上遣使齎書諭之

曰爾遣人自大同來言欲於平地駐劄意在臣順却慮前日犯邊之故又恐不容朕思果有此論是何言哉孰不知古人之治天下惟安民而已豈有懷私讐以致傷物者耶且爾等本元之臣彼幼君流離沙漠餘氣尙存爾不得不聽命於彼前日犯邊爾各爲其主何慮哉去就之機在乎識時今者入國觀光維其時也誠與不誠亦在於彼但彼中若有知時者使上觀天衆下察人事自取避凶趨吉之道不亦美乎爾其圖之

丙辰

左副將軍李文忠率師至豐州分道追擊胡兵擒其故官十二人俘虜其衆二百二十人并獲馬駝牛羊甚衆又聞胡兵屯伯干兒之地遣兵追之不及而還



卷九十三

洪武七年九月丁丑

上謂廷臣曰草木無心遇春而長茂遇秋而零落氣之所感猶知榮悴況於人乎崇禮侯買的里八剌南來已五載今既長成豈無父母鄉土之恩宜遣之還於是厚禮而還之選老成宦者咸禮袁不花帖木兒二人送其行復遣其父愛猷識里達臘織金文綺及錦衣各一襲買的里八剌辭行上諭之曰爾本元君子孫國亡就俘曩卽欲遣爾以歸爾年幼道理遼遠恐不能達今卽長成朕不忍令爾久客于此故特遣歸見爾父母親戚以全骨肉之愛又諭二宦者曰此爾故君之嗣也不幸至此長途跋涉爾善視之因致書與愛猷識理達臘曰順天者昌逆天者亡古今通論自古國家興廢氣運之常耳豈人力所能爲哉且君之父子當中國兵多將廣之時權不能自持故兵

多者蘊莽操懿溫之志次者頡頤互相攻擊日廢生民下者東送歎西歸附剝民以供上下君之父子曾出一令而誰何之歟今日之事如此君尙迷留不省何者蓋在至正之間兵多將廣尙不能駕馭又被逼挾今之衆壯弱不過二萬流離邊境意圖中興君之謀略不知何如耳君能自度今時之權比至正時低昂若何以此觀之豈不愚哉君以萬騎或七八千騎欲與全中國相抗予又不知輕重若何予謂君明天理若能悟我所言必得一族於沙漠中暫爾保持或得善終何以見之君之祖宗有天下者幾及百年養育之久生齒之繁以此知運雖去而祀或未終此亦天理之常也君若不悟不效古人之事他日加兵於彼禍有不可測者矣昔君在應昌所遣幼子南來朕待以殊禮已經五年今聞奧魯去全寧不遠念君流離沙漠無寧歲後嗣未有故特遣咸禮等護其歸庶不絕元之祀君其審之



庚寅

是月燕山都衛指揮使朱杲通州衛指揮僉事鄭治汝寧衛指揮僉事馮俊密雲衛指揮僉事張斌等率師出古北口防秋卒遇胡寇皆力戰以死上命所司厚恤其家親製文官遣臨祭其祭杲文曰爾自從軍以來累有戰功二十年間櫛風沐雨未嘗寧息及中原大定命爾北守燕山朕以爲天下大定爾必享無窮之福夫何主將乖於調發使爾猝然遇寇衆寡不敵朕知爾奮身苦戰終不能脫遂致殞身哀哉然人之生死古今常事歷代爲將陷身委命者有之如爾終不屈於他人慨然死節者鮮矣於戲奮志以報國捐生於鋒刃垂名萬世祿及子孫此心昭乎日月偉哉丈夫今以牲醴致奠爾其享之祭馮俊等文同  
冬十月乙未

賜兀刺歹冠帶衣服兀刺歹者故元諸王也洪武三年自大同來降  
留居京師



卷九十五

洪武七年十二月丙午

西安衛送寧夏來降故元參政保保都事盧庸等至京先是遣故元降臣賈伯等往寧夏招諭至是保保籍其所部將校二十人軍百人民一千戶馬三百一十四疋牛四十頭駝五十隻來降詔賜保保文綺二綿衣一襲

卷九十六

洪武八年春正月辛未

太原都衛捕送故元四大王黨與副樞馬勝等一十四人及所掠婦女十餘人至京上命斬勝等以婦女送還各家仍命吉安侯陸亨等緝捕太行山潛通四大王之人未幾獲男女一萬四百人送京師



卷九十七

洪武八年二月癸丑

上遣使詔大將軍徐達左副將軍李文忠右副將軍馮勝率濟寧侯顧時等回京其所統軍兵就令穎川侯傅友德南雄侯趙庸都督同知何文輝總領鎮北平

卷九十八

洪武八年三月壬戌

以故元國公卜顏帖木兒爲察罕腦兒衛指揮僉事其鎮撫千戶百戶五十七人俱以元平章知院等官爲之

戊子

故元知院不顏朶兒只等來降賜羅綺衣服有差不顏朶兒只者卽元國公乃兒不花也於是詔置官山衛指揮使司隸大同都衛以乃兒不花爲指揮同知



卷一百

洪武八年五月丙戌

故元廣平王保咱司徒保保威寧王帖木兒等十一人自大同來降上其印章獻馬六匹上納其馬二匹餘命還之賜酒醴衣服越數日召見復賜保咱保保綺羅及帛各十六疋帖木兒等賜物有差以保咱爲蒙古右衛指揮僉事保保爲鎮撫令往大同招撫其屬帖木兒與所部軍校五十八人皆居京師

六月乙未

改蒙古衛爲蒙古左衛調保咱爲指揮僉事仍置蒙古右衛

秋七月壬戌

命曹國公李文忠爲征虜左副將軍濟寧侯顧時爲左副副將軍往山西北平整率軍馬代穎川侯傅友德永嘉侯朱亮祖還京

八月己酉

故元將王保保卒先是保保自定西之敗走和林愛猷譏理達臘復任以事後從徙金山之北至是卒于哈剌那海之衙庭其妻毛氏亦自經死



卷一百一

洪武八年九月己未

上遣使勅諭征虜左副將軍曹國公李文忠左副副將軍濟寧侯顧時等曰孟秋遣爾代穎川侯等還以息風霜之勞今三越月矣曾得胡人消息否可遣輕騎數十潛入其地候其動靜如獲其人必得情實古人用兵務知彼知己以朕料彼今年得種羊馬頗牧豈不爲苟延之計設若驅其殘兵來寇邊境爾等當督三軍一鼓而俘之彼若不來亦當堅壘壁謹斥候以備不虞

卷一百三

洪武九年春正月丁卯

遣使勅勞大同衛指揮使周立曰古之馭天下者君用臣之能臣奉君之命上下各盡其道以圖至治是以功著史冊名垂不朽今朕有天下封疆之廣四際遐荒各選能臣握強兵而守險塞卿北鎮雲中當沙漠苦寒之地晝驅馳於戎馬夜運謀於機密心神俱勞朕甚憫焉今者首春氣和堅冰漸解塞草將萌胡馬瘦而弓力弱卿宜解甲暫自休息俟秋高馬肥然後控弦執矢觀釁而動古人謂致人不致於人卿其審之

癸未

是月命中山侯湯和穎川侯傅友德僉都督藍玉王弼中書右丞丁玉帥師往延安防邊上諭和等曰自古重於邊防邊境安則中國無



事四夷可以坐制今延安地控西北與胡虜接境虜人聚散無常若邊防不嚴卽入爲寇待其入寇而後逐之則塞上之民必然受害朕嘗勅邊將嚴爲之備復恐久而懈惰爲被所乘今特命卿等率衆以往竅至邊上常存戒心雖不見敵常若臨敵則不至有失矣○故元四大王連結普賢奴等寇朔州山西民賈驢秃魯不花亦聚衆應之

卷一百五

洪武九年三月丙寅

察罕腦兒衛遣軍校脫脫帖木兒送故元降官荅刺海至京詔賜衣服

癸未

是月胡兵屯山西燕只斤之地都指揮使常守道率兵擊之獲達官阿刺木等及馬駝牛羊凡二千八百餘其衆潰去

夏四月己酉

官山衛指揮同知乃兒不花叛入沙漠大同衛指揮使周立率大同振武等衛將士討之追及白寺塔灘獲其輜重乃兒不花夜遁去



卷一百六

洪武九年五月壬午

是月故元國公九住寇陝西塔灘之地陝西都指揮司發兵擊之追及于三不刺獲九住及平章不荅失里等四十人餘衆遁去

六月己丑

勅諭大將軍徐達等曰六月四日早金星犯畢右股北第一星主夷狄兵起以分野推之應在趙地今故元四大王不滿二百人官軍屢捕不獲前者皆云其衆無馬今乃言有十五騎相從出沒不知劫奪於何人者蓋由爾諸將不乘機勦捕致令若此勅至速遣智勇將士四面捕之毋致蔓延其大同岢嵐諸處亦令守禦官軍嚴爲備禦

卷一百七

洪武九年秋七月丁丑

故元平章兀納歹執伯顏帖木兒自綏德來降先是中山侯湯和等至延安伯顏帖木兒遣人乞降上聞之召諸將悉還獨留傅友德屯邊以備勅諭友德曰無事而請降兵法所戒爾其慎之至是伯顏帖木兒果乘間入寇友德大破之俘其衆獲輜重羊馬無算兀納歹遂縛伯顏帖木兒以降



卷一百八

洪武九年八月戊子

勅燕山前後永清左右薊州永平密雲彭城濟陽濟州大興十一衛分兵守北邊關隘時關隘之要者有四曰古北口曰居庸關曰喜峰口曰松亭關而烽墩相望者一百九十六處徼巡將士六千三百八十四人初俱用北軍至是始選江淮軍士參之

卷一百九

洪武九年閏九月丙午

淮安府海州儒學正曾秉正上疏曰中略臣聞易之爲書也貴陽而賤陰春秋之法內中國而外夷狄蓋中國者陽也夷狄者陰也臣觀竊近來蒙古色目之人多改爲漢姓與華人無異有求仕入官者有登顯要者有爲富商大賈者古人曰非我族類其心必異安得無隱伏之邪心懷腹腓之怨咨宜令復姓絕其番語庶得辨認可以斟酌處置其典兵及居近列之人許其避退又臣前過江浦見遷塞外之俘累累而有他思此係輦轂近甸豈可容此恐數年之後與之玩熟相忘生育繁盛中間豈無強詐之徒其或鳥驚獸駭犯屬車之清塵則爲陰長抗陽矣晉人不聽江統徙戎之論後悔無及此實中華陰類幸處之不失其所至於五里紊度各有所自伏願陛下推類而求



之修己之德弭天之變則災異可消天心可回而國祚永昌矣下略

太祖實錄 洪武九年閏九月 之修己之德弭天之變則災異可消天心可回而國祚永昌矣下略

卷一百十一

洪武十年夏四月乙亥

是月故元將也速寇慶陽慶陽衛兵擊却之



卷一百十二

洪武十年五月丁亥

山西行都司言所轄邊民請自備兵械團結防虜寇掠從之

卷一百十六

洪武十年十二月癸酉

永平衛指揮劉廣巡邊兵次中興州胡兵三百餘騎奄至廣率兵奮擊之斬其騎士百餘人擒其平章安童以歸餘衆潰去



卷一百十八

洪武十一年夏四月辛未

元嗣君愛猷識理達臘殂於沙漠

卷一百十九

洪武十一年六月壬子

遣使致祭故元幼主於沙漠上命禮部臣曰曩者元運既終其末帝能知天命遁歸沙漠今聞其子愛猷識理達臘歿可遣使吊祭禮部臣對曰道理遼遠使者難至况彼久離中華漸變異俗非典禮所加上曰帝王以天下爲家彼不出覆載之外何遠之有彼雖異俗其愛憎之情未嘗不同敬其主則其臣悅况典禮所加其孰肯違德舍禮哉於是自爲文祭之曰生死廢興非一時之偶然乃天地之定數古之聖賢於是四者一或臨之不爲之變何也蓋知天命而不惑者也君之祖宗昔起沙漠彎弧執矢入我中國橫行天下九夷八蠻盡皆歸之非天命不至是也及君之父子正當垂衣守成之時而盜生汝穎華夏騷然號令不行以致失國此人事歟天道歟朕於其時非有



三軍六師以威天下乃代君家而爲民主亦莫非天命也曩者君主沙漠朕主中國君與群臣乃固執不移致邊警屢興今聞君殯於沙漠朕用惻然特遣人致弔奠以牲醴以享爾靈爾其鑒之

七月己亥

遣廣東布政使趙亨堅賈詔諭故元丞相驢兒于應昌曰天道惡盈而好謙喜生而惡殺此亙古今之明訓也曩古天更元運之時卿率步騎著堅貞之節捍禦邊陲今已十一年矣嘗遣人通問未得報音故再遣人詣所在以禦寒之衣賜卿卿能受賜安處塞上以備後嗣之福豈不智人也哉朕言至此惟卿以智力之慎毋爲愚者所迷書云作善降之百祥作不善降之百殃惟順理則吉卿宜審之

九月丙申

復遣使弔祭故元嗣君子沙漠

卷一百二十

洪武十一年冬十月乙丑

山西邊將遣人送所獲故元平章完者不花至京師完者不花者故元丞相驢兒部屬也上遣使歸之於驢兒且以璽書諭之曰十一月六日至九月三遣使北行兩爲弔祭一爲致禮於卿既而使者俱不返存亡不可知乃者邊將以卿部屬平章完者不花送京師朕怒邊將以爲方遣使通好乃執其平章豈不失信於卿今特遣內臣送之抵丞相營宥之罪之放逐之卿自爲區處



卷一百二十一

洪武十一年十一月庚午朔

置寧化守禦千戶所初山西既平唯靖樂縣餘孽四大王遁入盧芽山數出寇掠爲居民患六年千戶唐誠吉率兵於同瓦溝椽房山捕其黨哈刺張送京師斬之至是復於寧化鎮築城設千戶所爲捕滅之計仗

十二月戊辰

詔諭故元丞相哈刺章蠻子驢兒納哈出等曰自有元多事群臣有棄君親而自苟全者有抗朝命而自爲者目擊耳聞實非一人卿等獨奮忠仗義衛君深塞歲月如流倏然十有一年今聞爾君因疾而崩在卿等可謂有始有終良臣之名播矣或聞欲立新君其新王有三卿等正在猶豫之間此三人皆元之嫡派卿等若欲堅忠貞之意

毋抑尊而扶卑理應自長而至幼無乃人倫正天道順也歟若有賢愚之別禮雖備拘從賢則吉夫當流離之際而爲臣者猶能竭力爲之不絕有元之祀美聲盈人耳豈不難哉苟或不然尊卑賢愚置之弗論但以立君爲名而內自有專生殺之威則非人臣之道矣况同類頡頏彼此疑猜當此之際卿等富貴若風中之燭命如草杪之霜深可慮也



卷一百二十五

洪武十二年六月丁卯

命都督僉事馬雲統兵征大寧上諭之曰聞寇甚黠知官軍至悉遁入山兵回復出如是則宜以大軍分駐要害之地遣人招撫之招之不至則伏兵以伺必盡獲之凡得賊首卽其地斬之以警其餘

丙子

勅信國公湯和曰今年春命爾率諸將練兵于臨清以備北邊今遣使賈符詣軍召吉安侯陸仲亨江夏侯周德興宜春侯黃彬還京其所部騎兵令南安鞏昌河南永嘉四侯分領之以伺北虜消息常宜遣人往來山東北平大將軍所計議邊務慎之無忽

甲申

賜元丞相驢兒書曰邇者人自土河來言今歲丞相微有疾於事頗

滯朕聞之深爲丞相憂今特遣人賈藥物賜丞相其服之毋疑

秋七月乙巳

胡寇犯阿蘭溪口大同右衛指揮魏平率兵擊敗之獲其平章保哥等及其衆六百餘人

己未

故元右丞周亨等八人率兵民二百八十七人自沙漠來歸魏國公徐達遣指揮武興迎於山後適與故元平章乞奴等六人遇擒之并獲其樞密分院銀印來上



卷一百二十七

洪武十二年十一月庚申

都督僉事馬雲征大寧寇平之還京賜綺帛各五疋其所領將士有功者指揮而下賜綺帛有差軍士鈔三錠隨征無功者指揮而下綺帛視有功者半之軍士鈔二錠

卷一百三十

洪武十三年二月壬申

上以故元國公脫火赤樞密知院愛足率衆萬餘屯于和林恐爲邊患命西平侯沐英率陝西兵往討之

三月壬子

西平侯沐英師至靈州遣候騎偵知脫火赤等兵次亦集乃路英遂率師渡黃河經寧夏歷賀蘭山涉流沙凡七日夜至其境去穹廬五十里分軍爲四道至夜啣枚而進合圍之擒脫花赤愛足等盡獲其部曲以歸



卷一百三十一

洪武十三年夏四月甲申

都督濮英陳兵西涼襲虜故元柳城王等二十二人民一千三百餘人并獲馬二千餘疋遣使以所獲符印來上

五月壬寅

都督濮英兵至白城獲故元平意忽都帖木兒進至赤斤站之地獲故元幽王亦憐真及其部屬一千四百人金印一

卷一百三十二

洪武十三年六月癸亥

遣使賈勅諭北平山西陝西四川廣東廣西遼東福建都指揮使司布政使司會計邊衛之地見儲倉糧及今年所徵田糧可給軍餉及官吏月俸幾年具報戶部以聞

七月甲辰

都督濮英兵至苦峪獲故元省哥失里王阿者失里王之母妻及其家屬斬部下阿哈撒荅等八十餘人遂還兵肅州



卷一百三十四

洪武十三年十一月丙午

故元平章完者不花與乃兒不花率胡騎數千入桃林口寇永平掠民貲畜指揮劉廣率兵禦之時步兵多騎兵少廣令步卒繼後獨率四十餘騎先至城北三十里蔡家莊遇胡騎千餘卽迎擊之兵少不敵後軍又不繼胡兵射中廣馬馬驚仆地遂被殺左右多戰死千戶王輅被傷裹創臨陣會後軍至陰令部下先分兵伏遷民鎮界陵等處邀其歸路又分兵出燕河夾擊之胡兵敗走輅乘勢追至遷民鎮伏發擒完者不花以歸乃兒不花遁去

卷一百三十五

洪武十四年春正月戊子

故元平章乃兒不花等寇邊上命魏國公徐達爲征虜大將軍信國公湯和爲左副將軍穎川侯傅友德爲右副將軍率諸將士往討之辛亥  
征虜大將軍魏國公徐達發燕山等衛屯兵萬五千一百人修永平界嶺等三十二關



卷一百三十六

洪武十四年三月壬寅

遣使賈勅諭征虜大將軍魏國公徐達左副將軍信國公湯和右副將軍穎川侯傅友德曰今夏及秋胡人必伏精兵於近塞以待我師卿等欲輕騎進擊不可不為深謀必先知彼虛實迺可行兵若知彼之計宜遣三四百人先入其境而以精騎繼之其先行者必有擒獲執而詢之可得情實有伏則引還誘其追我度其行遠勢困則反擊之必得其利無伏即以精兵擣之可也若大軍未可出塞且留營北平

卷一百三十七

洪武十四年夏四月庚午

大將軍徐達率諸將出塞右副將軍傅友德至北黃河虜騎駭遯友德選輕騎夜襲灰山克之獲其部落人畜甚衆西平侯沐英等略公主山長塞殲其戍卒獲全寧四部以歸



卷一百三十八

洪武十四年秋七月壬寅

故元將校火里火真四十一人及遺民一百七十七戶自沙漠來歸

賜火里火真等文綺四十六匹帛三十六匹鈔一百六十九錠其遺

民命居北平月以米鈔給之

八月辛巳

大將軍魏國公徐達等征北還

卷一百三十九

洪武十四年冬十月乙丑

故元平章董善政等五十七人自沙漠來歸



卷一百四十一

洪武十五年春正月丙戌

命翰林院侍講火原潔等編類華夷譯語上以前元素無文字發號  
施令但借高昌之書製爲蒙古字以通天下之言至是乃命火原潔  
與編修馬沙亦黑等以華言譯其語凡天文地理人事物類服食器  
用靡不具載復取元祕史參考紐切其字以諧其聲音既成詔刊行  
之自是使臣往復朔漠皆能通達其情

卷一百四十八

洪武十五年九月丁卯

北平都司言邊衛之設所以限隔內外宜謹烽火遠斥候控守要害  
然後可以警服胡虜撫輯邊氓按所轄關隘曰一片石曰黃土嶺曰  
董家口曰義院口曰箭箬嶺曰孤窰兒曰劉家口曰河流口曰徐流  
口曰冷口曰界嶺口曰青山口曰乾澗兒曰桃林口曰重峪口曰石  
門子曰白道子曰白羊峪曰石湖洞曰五重庵曰新開嶺曰佛面山  
曰栲栳山曰擦崖子曰城子嶺曰大峪曰水峪曰中寨曰榆木嶺曰  
青山曰遊卿口曰鐵門口曰大喜峰口曰小喜峰口曰團亭寨曰潘  
家口曰常峪寨曰三臺山曰隘口寨曰龍井寨曰朝兒嶺曰松陀兒  
曰松棚峪曰青山大嶺曰木潭嶺曰臭麻峪曰刀山寨曰分水嶺曰  
馬蹄峪曰洪山寨曰蔡家峪曰秋科峪曰于家峪曰道溝峪曰羅文



峪曰貓兒峪曰山寨峪曰小搗角山曰大搗角山曰會仙台曰沙披  
峪曰山口西寨曰片石峪曰冷背頭口曰楮皮寨曰尖山寨曰龍池  
寨曰大安口曰井兒峪寨曰鮎魚石口曰琵琶峪寨曰馬蘭峪曰平  
山寨曰寬田峪曰南山頂寨曰餓老婆頂寨曰滴水峪小寨曰北山  
頂曰滴水峪北山等寨曰錄山頂曰峯台嶺寨曰古強峪曰恥瞎峪  
曰鑽天嶺曰黃崖口曰小平安嶺曰大平安嶺曰三山寨曰蠶椽峪  
曰青山嶺曰彰作里曰將軍石口曰喝山寨曰黃松峪曰文家莊曰  
魚子山曰蕭家嶺曰熊兒嶺曰沙嶺兒曰灰峪山曰灰嶺兒曰豬圈  
頭曰山背頭曰木場峪曰灰塘峪曰墻子嶺曰磨刀峪曰許家峪曰  
蒼水會曰小黃崖曰大黃崖曰石堂峪曰姜毛峪曰蘇家峪曰大虫  
峪曰遙橋峪曰南峪曰燒香峪曰墨峪口曰峯臺峪曰高梁子曰小  
水峪曰漢兒嶺曰城子山曰倒班嶺曰杷頭嶺崖曰師姑峪曰梧桐

安曰齊頭崖曰栢嶺安曰將軍臺曰盧家安曰司馬臺曰了髻山曰  
沙嶺兒曰博梁子曰龍王峪曰師婆峪曰古北口曰潮河寨曰祚峪  
曰陟道峪曰蠶房峪曰陳家峪曰東駝骨曰西駝骨曰白馬甸曰划  
車嶺曰馮家峪曰營城嶺曰黃崖口曰石塘嶺曰東石城曰西石城  
曰東水峪曰白道峪曰牛盆峪曰小水峪曰水口峪曰河坊口曰神  
堂峪曰开連口曰加兒嶺曰驢鞍嶺曰南冶嶺口曰黃花鎮曰西水  
峪曰棗園峪曰灰嶺口曰賢莊口曰錐石口曰德勝口曰虎峪口曰  
居庸曰陽峪口曰蘇林口曰白羊口曰柏峪口曰高崖口曰方良口  
曰常峪口曰長城嶺曰沿河口曰石港口曰小龍門口曰天井關曰  
東龍關曰天橋關曰天門關曰洪水口曰西龍門曰段口曰石峩口  
曰蘭芳口曰鹿角口曰南龍門曰馬水口曰道水口曰石塘口曰金  
水口凡二百所宜以各衛校卒戍守其地詔從之



卷一百六十七

洪武十七年閏十月乙未朔  
故元國公抹陀等四人自沙州來歸詔賜衣服文綺鈔錠

卷一百七十六

洪武十八年冬十月己丑朔

御製大誥成須示天下初元氏以戎狄入主中國大抵多用夷法典章疏闊上下無等政柄執於權臣任官重於部族斷獄迷於財賄黜陟混於賢愚奢而僭上者無罪奸而犯倫者不問辮髮左衽將率而爲夷至元天曆之時雖稱富庶而先王之制蕩然矣至順帝荒淫昏弱紀綱益廢內之奸臣亂政外之強將跋扈典兵者崇空名牧民者無善政仕進者尙阿附而輕廉恥讀書者重浮華而乏節行庶績不凝四民失序加以舞文之吏玩法于上豪強之家兼併于下事無統紀民無定志一遇兇荒而亂者四起由法制不明而彝倫之道壞也上嘗歎曰華風淪沒彝道傾頽自卽位以來制禮樂定法制改衣冠別章服正綱常明上下盡服先王之舊使民曉然知有禮義莫敢犯



分而撓法萬機之暇著爲大誥以昭示天下且曰忠君孝親治人修己盡在此矣能者養之以福不能者敗以取禍頌之臣民永以爲訓

卷一百七十九

洪武十九年十一月辛亥

是月上諭宋國公馮勝曰納哈出據金山數侵擾遼東宜於大寧諸邊隘分兵置衛以控制之遂詔戶部出內庫鈔一百八十五萬七千五百錠散給北平山東山西河南及迤北府州縣令發民夫二十餘萬運米一百二十三萬餘石預送松亭關及大寧會州富峪四處以備軍餉每夫運米一石給鈔六錠爲其直及道里費



卷一百八十

洪武二十年春正月癸丑

命宋國公馮勝爲征虜大將軍穎國公傅友德爲左副將軍永昌侯藍玉爲右副將軍南雄侯趙庸定遠侯王弼爲左參將東川侯胡海武定侯郭英爲右參將前軍都督商嵩參贊軍事率二十萬北伐又命曹國公李景隆申國公鄧鎮江陰侯吳良等皆隨征師行上諭勝等曰虜情詭詐未易得其虛實汝等慎無輕進且駐師通州遣人覘其出沒虜若在慶州宜以輕騎掩其不備若克慶州則以全師徑擣金山納哈出不意吾師之至必可擒矣既而上復遣前所獲番將乃刺吾北還以書諭納哈出及毛闕撒里達溫蠻子晃失台和尚伯蘭等曰昔者天更元運華夏奮爭朕自甲辰春親定荆楚歸遣諸將東平吳越洪武初遂命中山武寧王開平忠武王率甲士渡江越淮以

定中原元君北奔深塞於是息民於華夏諸夷附者莫不奠安今二十年矣唯爾納哈出等聚兵愈出沒不常意較勝負由是乃刺吾留而未遣今有年矣朕推人心誰無父母之念夫婦之情故特命其生還以全骨肉之愛且聞其善戰今遣北歸更益爾戰將他日再較勝負爾心以爲何如嗚呼天之改物氣運變遷果人事之必然耶抑天道之使然耶茲命儀禮司官前僉院蠻子鎮撫張允恭送乃刺吾抵爾所在使者未審可還乎餘不多及

二月甲申

大將軍宋國公馮勝等兵至通州遣邏騎出松亭關聞虜騎有屯慶州者乃遣右副將軍藍玉乘大雪將輕騎往襲之殺其平章果來擒其子不蘭奚并獲人馬而還



卷一百八十一

洪武二十年三月辛亥朔

大將軍宋國公馮勝等率師出松亭關築大寧寬河會州富峪四城  
遂提兵駐于大寧

夏四月庚寅

詔山東北平河南山西四布政司凡運糧赴大寧者免徵其戶今年  
夏稅

卷一百八十二

洪武二十年五月丙寅

遣使齎勅諭大將軍宋國公馮勝等曰往者慶州之捷俘虜赴京者  
皆云胡已北行遼東送來降者所陳亦同五月五日得軍中遣至降  
胡又云納哈出棄金山巢穴營於新泰州去遼陽千八百里朕計群  
胡雖起營北行似若遠遁尙恐詭謀竊發尤不可不爲之備況今天  
象水火相犯迨至八月天象屢有警諸將宜嚴號令整行伍遠斥候  
以逸待勞則必有當之者矣

庚午

大將軍宋國公馮勝留兵五萬守大寧率大軍趨金山

辛未

上復遣使密勅大將軍宋國公馮勝等曰前日以天象之變戒卿等



軍中之事嚴爲之備今觀所徵其咎在虜揆之人事正與天合宜乘機進取不可稽緩朕計納哈出去金山未遠以兵促之勢必來降且胡主爲我得志無意窮追必須逐水草往來黑山魚海之間乘其趨起攻其無備虜衆可盡圖也

甲戌

儀禮司官蠻子鎮撫張允恭以所送乃刺吾至大將軍馮勝營勝復遣人送之納哈出所

六月丁酉

大將軍宋國公馮勝等至遼河之東獲納哈出屯卒三百餘人馬四十餘疋遂進師駐金山之西是時乃刺吾還至松花河見納哈出納哈出大警曰吾謂汝死矣今日乃復得相見執手勞問殷勤乃刺吾因諭納哈出朝廷所以送還之意納哈出喜卽遣其左丞劉探馬赤

參政張德裕隨使者張允恭等至勝軍獻馬欲因以覘我勝遣人送赴京師旣而納哈出送乃刺吾至漠北虜主欲殺之左右諫曰乃刺吾久被俘囚今獲生還柰何殺之因得免復還納哈出所備以朝廷撫恤之恩語其衆由是虜衆多有降意

癸卯

大將軍宋國公馮勝等率師踰金山至女直苦屯納哈出部將全國公觀童來降

丁未

大將軍宋國公馮勝駐師金山東北遣右副將軍藍玉至納哈出營降其衆初納哈出分兵爲三營一曰榆林深處一曰養鵝莊一曰龍安一曰河輜重富盛畜牧蕃息虜主數招之不往及是大軍逼之納哈出計無所出乃刺吾因勸之降納哈出猶豫未決適大將軍馮勝



遣指揮馬某往諭之納哈出乃遣使至大將軍營陽爲納款而實覘兵勢勝遂遣玉往一禿河受其降虜使見大將軍師盛還報納哈出納哈出聞之乃指天嘖嘖歎曰天不復與我有此衆矣遂率數百騎自詣玉約降玉大喜出酒與之飲甚相歡納哈出因酌酒酬玉玉請之先納哈出卽飲訖復酌以授玉玉解衣以衣之謂曰請服此而後飲納哈出不肯服玉亦持酒不飲爭讓久之納哈出取其酒澆地願其下咄咄語將脫去時鄭國公常茂在坐其麾下趙指揮者解胡語以告茂茂直前薄之納哈出驚起欲就馬茂拔刀斫之傷臂不得去都督耿忠遂以衆擁之見勝納哈出所部妻子將士凡十餘萬在松花河北聞納哈出被傷遂驚潰餘衆欲來追勝遣前鋒將觀童往諭之於是其衆亦降凡四萬餘并得其各愛馬所部二十餘萬人羊馬驢駝輜重亘百餘里納哈出有二姪不肯降勝復遣人諭之乃折

弓矢擲于地亦來降勝以禮遇納哈出復加慰諭令耿忠與同寢食遣使奏捷于京仍奏常茂驚潰虜衆遂班師悉以納哈出來降將卒妻子及其輜重俱南行仍以都督濮英等將騎兵三千爲殿

閏六月甲寅

大將軍宋國公馮勝師還次于金山亦迷河俘獲北奔達達軍士遺棄車輛四萬四千九百六十三并馬數千匹傷殘蕃軍三萬四千二百二十九人

庚申

都督濮英殿大軍還道爲虜所乘死之初納哈出之降也餘衆驚潰者皆竄匿及聞大將軍旋師以降衆俱行甚憾之乃設伏於途俟大軍過而邀之英等後至伏發英猝爲所乘衆寡不敵英復馬踏遂見執英絕食不言乘間自剖腹而死



甲戌

大將軍馮勝捷奏至上遣使勅諭勝等曰劉鎮撫至備言軍中事納哈出入營大軍既定惟在處置得宜其本管將士省令各照原地方居住順水草以便牧放擇膏腴之地以便屯種如北平潮河川大寧全寧口南口北舊居之人立成衛分與漢軍雜處若瀋陽崖頭闔山願居者亦許與遼東軍參住從便耕牧務令人心安樂不致失所將士之數具實以聞朕將犒勞之常茂驚潰虜衆即令人械赴京師

卷一百八十三

洪武二十年秋七月庚辰

遣使賜故元降將納哈出玉帶一金飾香帶一白金一千兩文綺帛各四十四匹鈔一千貫又以素金帶百花素銀帶七百紗帽八百賜其將校那木罕等及銀鈔各有差仍遣使齎鈔三十萬錠織金文綺三千匹送赴燕府以備賞賜來降納哈出部衆

甲申

今上以故元將納哈出來降遣官奉表稱賀

丁酉

納哈出所部營王失刺八禿等來降先是納哈出既降營王失刺八禿等以病在道相失至是與雲安王蠻吉兒的郡王桑哥失里和尚國公等復來降大將軍馮勝遣人送之京師仍遣定遠侯王弼發定